

**静岡市配偶者等からの暴力の防止及び
被害者の支援に関する基本計画**

静岡市DV防止基本計画

平成26年3月

静岡市

はじめに

私たちが心豊かに安心して暮らしていくためには、男女がお互いの人権を尊重しつつ、喜びも責任も分かち合い、一人ひとりがその個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現が大変重要です。

男女共同参画社会を実現するための諸課題のひとつである配偶者からの暴力は、犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害にあたります。

外部からの発見が困難な家庭内において行われるため、潜在化し、被害が深刻化しやすくなるとともに、子どもに対する暴力との関係も指摘されるなど、社会全体で取り組むべき大きな問題となっております。

また、被害者の多くは女性であることから、その背景には、男女の社会的地位や経済力の格差、固定的な性別役割分担意識など、これまで男女が置かれてきた社会の歴史的・構造的な問題があるということも考えられます。

静岡市においても、「静岡市男女共同参画推進条例」第3条の「男女の人権の尊重」や第12条の「性別による権利侵害の禁止」を掲げるとともに、「第2次静岡市男女共同参画行動計画」の中でも「女性に対する暴力の根絶」を重点施策のひとつと位置づけ、配偶者等からの暴力の防止や被害者の支援等に取り組んでまいりました。

このたび、これら施策をより一層推進するため、国の「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」（平成25年法律第72号最終改正）や同施策に関する基本的な方針を受け、新たに「静岡市配偶者等からの暴力の防止及び被害者の支援に関する基本計画」を策定いたしました。

今後は、この計画に基づき、「男女間のあらゆる暴力の根絶」に向けて、配偶者等からの暴力の防止、被害者の保護や自立支援など切れ目のない施策について、関係機関等との連携も一層深め、市民に寄り添う最も身近な窓口として、積極的に取り組んでまいります。

結びに、本計画策定にあたり、熱心なご審議とともに答申をまとめていただきました静岡市男女共同参画審議会の委員の皆様をはじめ、貴重なご意見をお寄せいただきました多くの市民の皆様や関係機関・団体の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成26年3月

静岡市長 田 辺 信 宏

目 次

	ページ
1 基本計画の策定にあたって	
(1) 計画策定の背景	1
(2) 定義	2
(3) 計画の位置づけ	2
(4) 計画の期間	3
(5) 計画の目標	3
(6) 施策の基本目標	3
(7) 市と県の役割分担	3
2 DVに関する現状と課題	
(1) DVの現状	4
(2) 相談の状況	10
(3) 本市における課題	11
3 取り組むべき施策の方向性とその内容	
(1) 施策の基本的方向	12
(2) 体系図	24
4 施策の総合的な推進のために必要な事項	25
(1) 次期男女共同参画行動計画との整合	
(2) 的確な情報の収集・発信の充実	
(3) 新たな検討が必要となる事項への対応	
(4) 進捗状況の点検及び計画の見直し	
5 数値目標等	
(1) 成果指標	26
(2) モニタリング指標	27
6 参考資料	
○静岡県男女共同参画推進条例	28
○配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律	34
○国の基本的な方針	46
○静岡県男女共同参画審議会関係（答申書、委員一覧、会議経過）	52
○静岡県DV防止基本計画策定委員会設置要綱	55
○DV被害者支援の流れ	57
○用語解説	58

1 基本計画の策定にあたって

(1) 計画策定の背景

すべての人が安全で安心して暮らせる社会を実現するためには、あらゆる暴力を防止し、暴力を生み出さない社会をめざす切れ目のない取組が必要です。特に、配偶者等からの暴力（いわゆるドメスティック・バイオレンス〔以下、「DV」という。〕）は、犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害であり、決して許されるものではありません。

DVは、家庭内で行われることが多いため、外部からその発見が困難であり、潜在化しやすく、しかも加害者に罪の意識が薄いという傾向があります。このため、周囲も気づかないうちに暴力がエスカレートし、被害が深刻化しやすいという特性があります。また、被害者の多くが女性であり、その背景には、固定的な性別役割分担意識や経済力の格差等社会的・構造的な問題があるといわれており、DVは男女共同参画社会の実現の妨げの一因となっています。一方、災害時においては、避難生活や将来への生活の不安やストレスを抱えるなか、DVが避難所や仮設住宅等で顕在化することも懸念されます。

DVを含む女性に対する暴力防止の取組は、世界では、国際連合を中心として女性の人権擁護と男女平等の取組の中で取り上げられてきました。1979年（昭和54年）には国連総会において「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」を採択しています。また、1995年（平成7年）到北京で開催された第4回世界女性会議において、「北京宣言及び行動綱領」が採択され、その中で「女性及び少女に対するあらゆる形態の暴力を阻止し、撤廃する。」と明記されています。

我が国においては、2001年（平成13年）4月に配偶者からの暴力防止及び被害者の保護を図ることを目的とした「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」を制定し、2004年（平成16年）6月の改正では、「配偶者からの暴力」の定義を「身体に対する暴力」のほか「精神的暴力・性的暴力」も含めたものにするなど配偶者暴力防止及び被害者の保護について、一層の推進を図ることになりました。

また、2007年（平成19年）7月の改正では、保護命令制度の拡充、市町村における配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護と自立支援のための施策の実施に関する基本的な計画の策定や配偶者暴力相談支援センター設置の努力義務など、地域に根差した支援のため、市町村の果たす役割が重視されることになりました。

さらに、2013年（平成25年）7月の改正では、適用対象を拡大するため、生活の本拠を共にして交際をする関係にある相手からの暴力及びその被害者について、この法律を準用することとなりました。（2014年（平成26年）1月3日施行「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（以下、「DV防止法」という。））

本市では、これまでも「静岡市男女共同参画推進条例（以下、「条例」という。）」第3条の基本理念で「男女の人権の尊重」、第12条の「性別による権利侵害の禁止」の中で、「何人も、夫婦間を含むすべての男女間において、身体的、精神的、経済的、性的暴力等あらゆる暴力行為を行ってはならない」と規定しています。

また、2009年（平成21年）3月に策定した「第2次静岡市男女共同参画行動計画」の中では、基本的施策のひとつに「女性に対する暴力の根絶」を位置づけ、DV防止や被害者保護、自立支援等、各種施策に取り組んでいます。

本計画は、これまで取り組んできた状況や様々な課題を踏まえ、被害者への支援体制を充実し、DV防止と被害者の保護・自立支援等に関する施策を総合的、体系的に位置付け、これを実行することで本市DV対策の更なる推進を図るため、新たに「静岡市配偶者等からの暴力の防止及び被害者の支援に関する基本計画（略称：静岡市DV防止基本計画）」を策定するものです。

(2) 定義

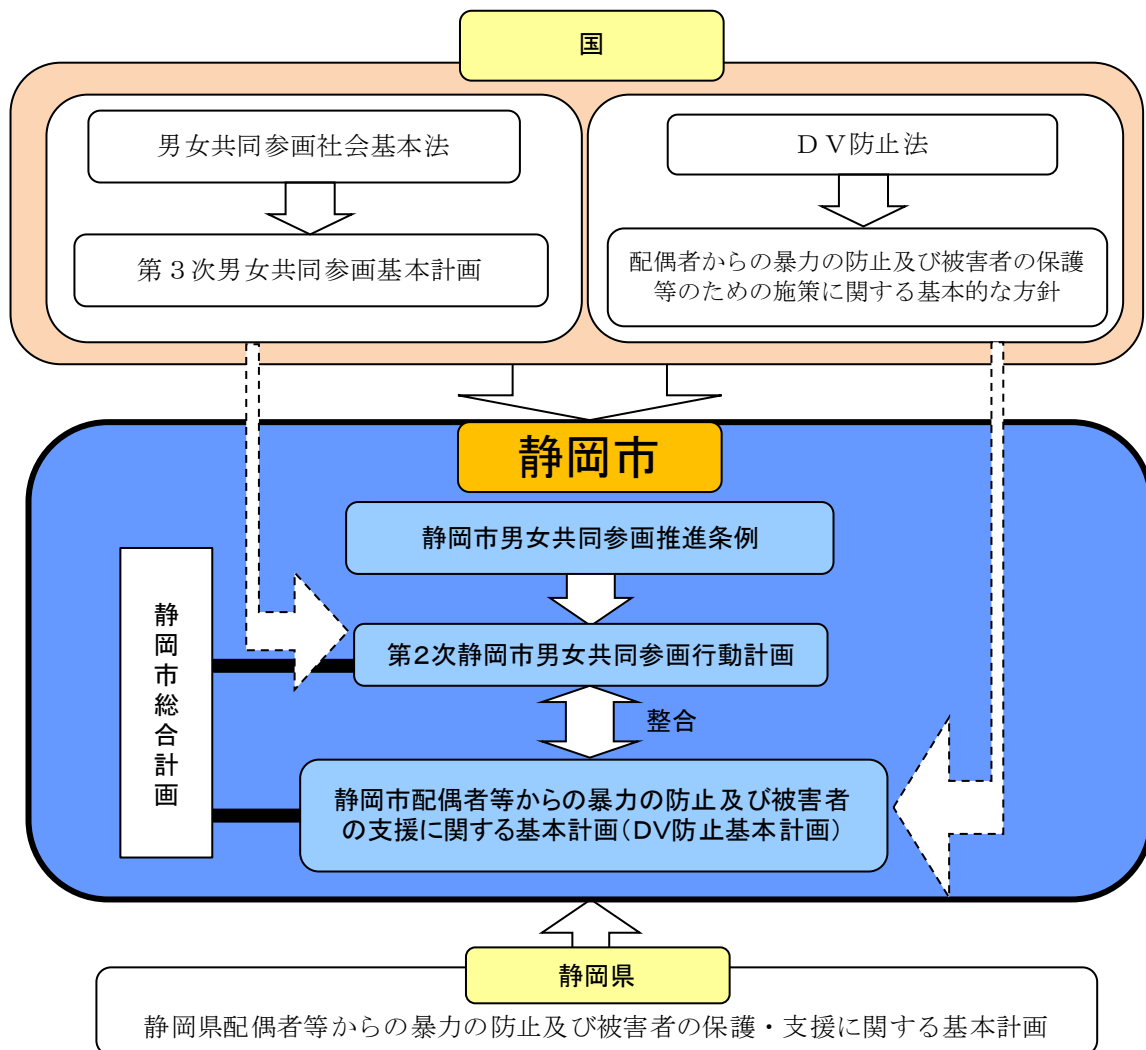
本計画では、「DV防止法」に規定する「配偶者（事実婚・元配偶者も含む）からの暴力」、または、生活の本拠を共にして交際をする関係にある相手からの暴力に加え、暴力の未然防止のための取組や啓発などについては、「交際相手からの暴力」（いわゆるデートDV〔以下「デートDV」という。〕）も対象として含めることとします。これは昨今、若年層を中心に交際相手からの暴力も深刻な状況にあるからです。

また、「暴力」とは、殴ったり蹴ったりするなど直接何らかの有形力を行使する「身体的暴力」だけでなく、心無い言動等により相手の心を傷つける「精神的暴力」、生活費を渡さない等の「経済的暴力」、嫌がっているのに性的行為を強要する等の「性的暴力」を含みます。

(3) 計画の位置づけ

この計画は、DV防止法第2条の3第3項の規定に基づき静岡市が策定する「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の実施に関する基本的な計画」であり、条例第16条の規定に基づく「第2次静岡市男女共同参画行動計画」の施策の基本的方向の「女性に対する暴力の根絶」に位置づけられた取組と整合性を有するものです。

また、まちづくりの指針である「静岡市総合計画」を上位計画としています。



(4) 計画の期間

この計画の期間は、2014年度（平成26年度）から2022年度（平成34年度）までの9年間とします。

ただし、「DV防止法」の改正や国の「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策に関する基本的な方針（以下、「基本方針」という。）」の改定などにより、新たに計画に盛り込むべき事項が生じた場合は必要に応じ見直しを行います。

(5) 計画の目標

条例第3条に規定される「男女間のあらゆる暴力の根絶」を計画の目標とします。

(6) 施策の基本目標

この計画では、次の5つの施策の基本目標を掲げ、それぞれの施策を推進します。

基本目標1 DVを生み出さない社会づくりの推進

基本目標2 身近で相談できる体制の整備

基本目標3 被害者の安全確保の徹底

基本目標4 被害者の自立支援の充実

基本目標5 推進体制の構築

(7) 市と県の役割分担

国は「基本方針」の中で、都道府県に対し、DV被害者支援の中心的な役割を果たすことを期待しております。一時保護等の実施という極めて重要な役割とともに、市町村への支援、職務関係者の研修など、広域的な施策等に取り組むことが望ましいとしています。特に都道府県の配偶者暴力相談支援センターに対しては、都道府県における対策の中核として、処遇の難しい事案への対応や専門的・広域的な対応が求められる業務にも力を注ぐよう望んでいます。

一方、市町村に対しては、DV被害者に最も身近な行政主体として、相談窓口の設置、支援に関する情報提供、自立に向けた継続的な支援の実施等の基本的な役割について、積極的に取り組むことを期待しています。

これを受けて、静岡県では、平成13年10月のDV防止法の施行に伴い、静岡県女性相談センター（婦人相談所）を、平成14年度からは「配偶者暴力相談支援センター」としての機能も果たす施設として定めています。現在、県では、市町、警察関係者、一時保護委託先等に対する研修や関係機関の要請による講師の派遣等も行っています。

本市では、DV被害者の立場に立ち、よりきめ細やかで迅速な支援を行うため、「静岡市配偶者暴力相談支援センター」機能を整備し、婦人相談員及び関係機関と連携し、被害者支援を推進していきます。

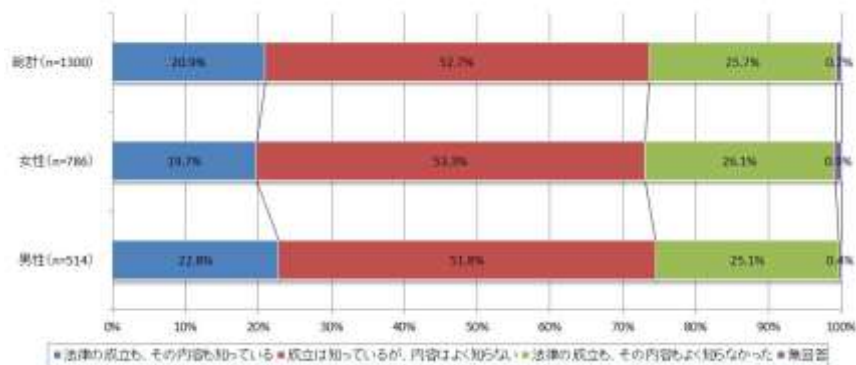
2 DVに関する現状と課題

(1) DVの現状

静岡市では、2012年度（平成24年度）に、「男女間における暴力に関する調査（以下、「DV実態調査」という。）」を実施しました。これらの調査結果から見える現状の一部を紹介します。

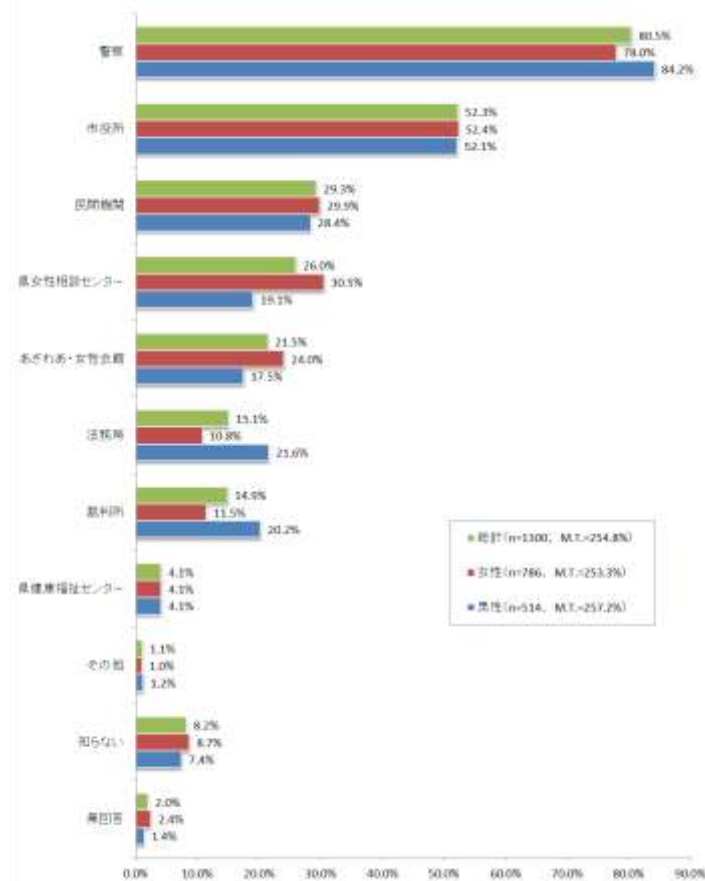
DV防止法の認知度 図1

過半数が「法律の成立は知っているが、内容はよく知らない」と回答。



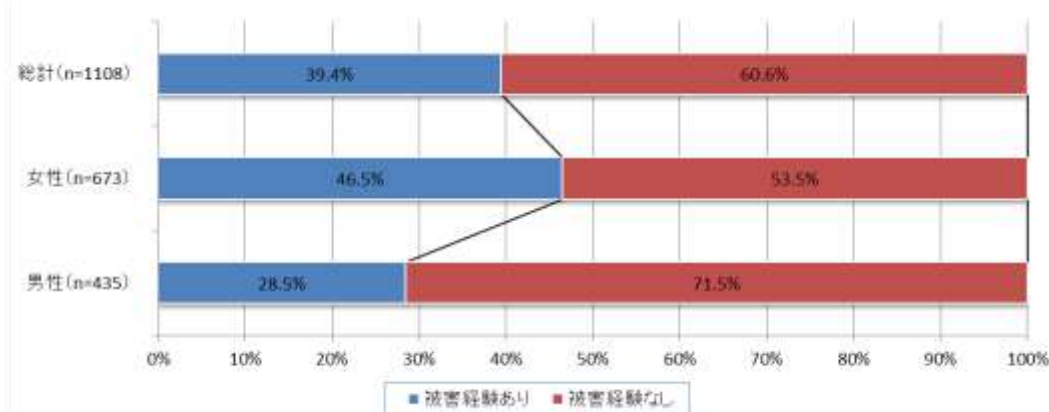
相談窓口の認知度 図2

相談できる窓口として知っている所は「警察」、「市役所」、「民間機関」の順に多い。

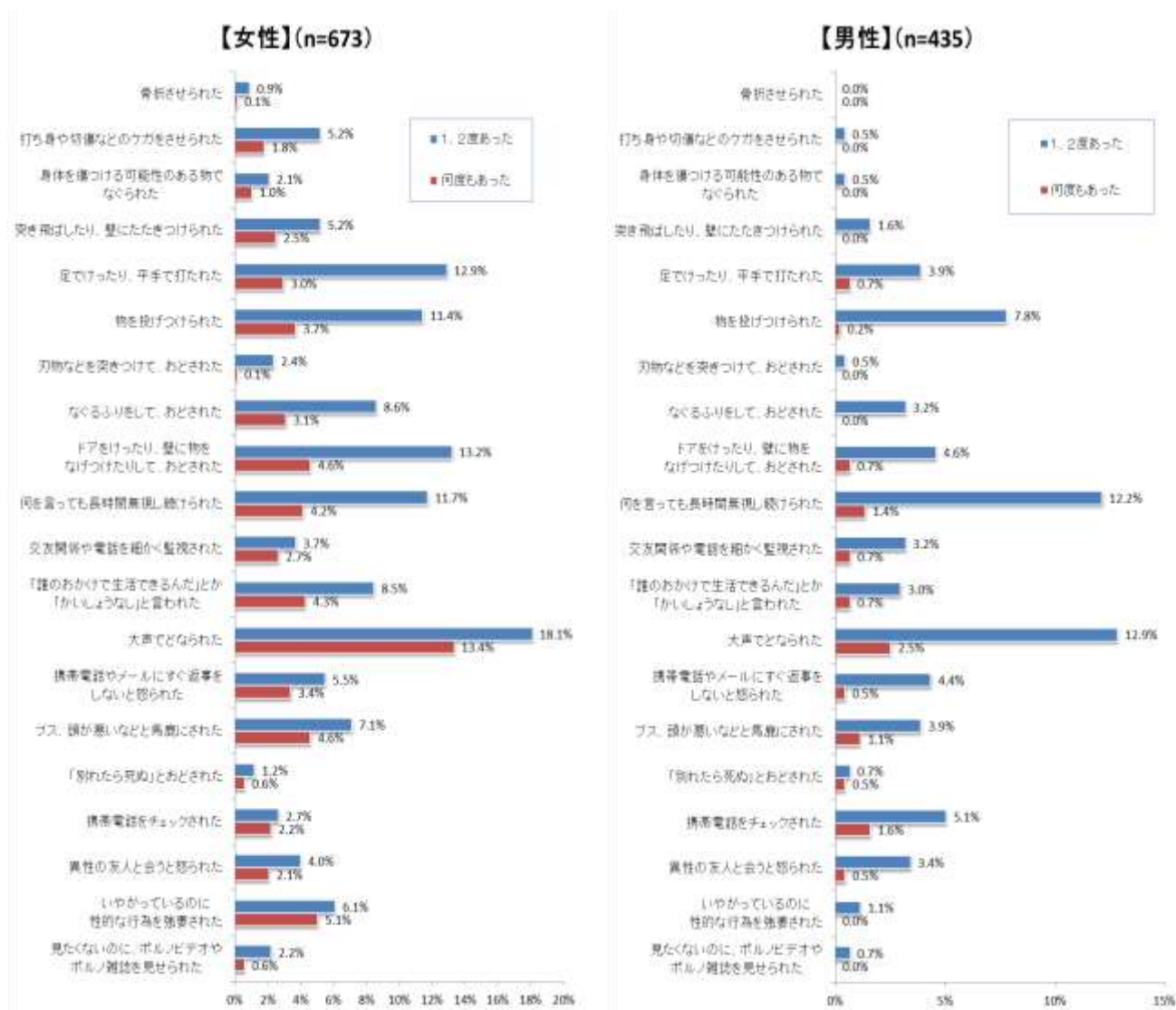


配偶者からの被害経験の有無 図3

約3人に1人は配偶者から被害を受けたことがある



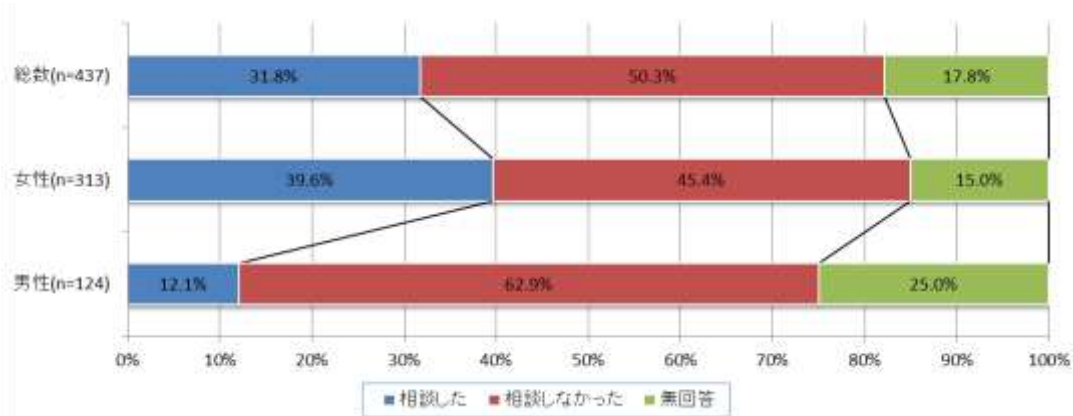
「大声でどなられた」女性は、約7人に1人が何度も被害を受けている



※ 本市DV実態調査では潜在的な案件も把握するため、調査項目が詳細になっていることから、他の同様調査よりDV被害人数が高めとなっております。

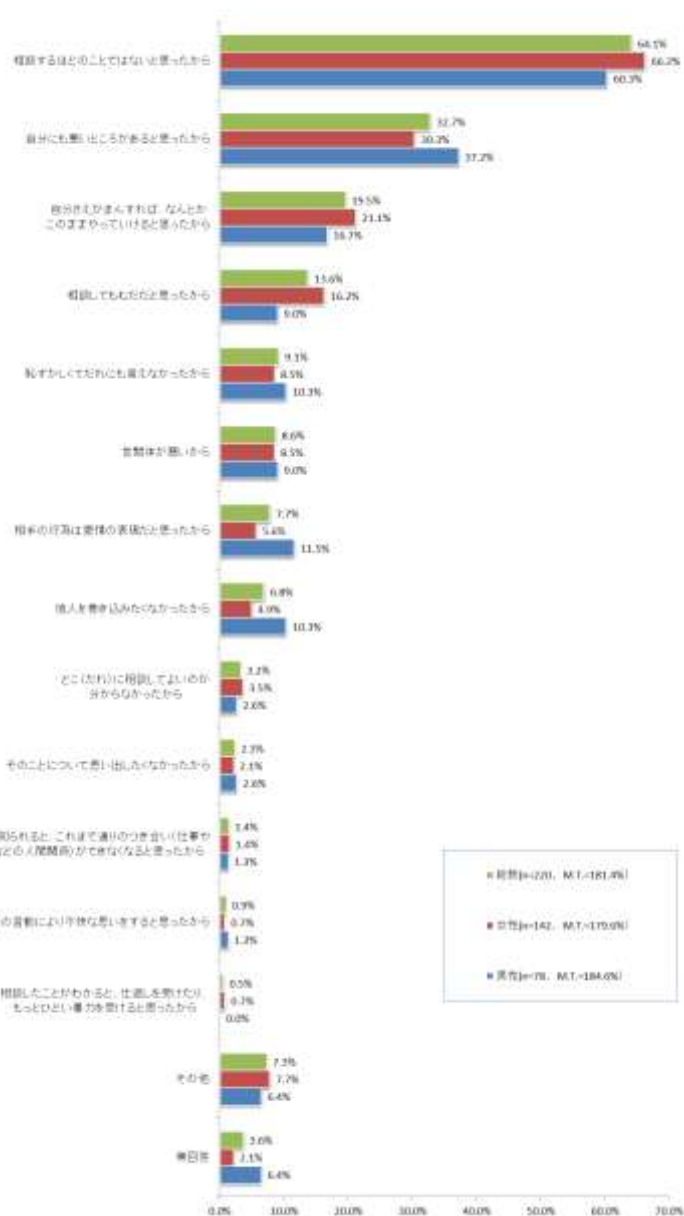
配偶者からの暴力に対する相談の有無 図4

被害を受けた人の約5割はどこ（だれ）にも相談していない



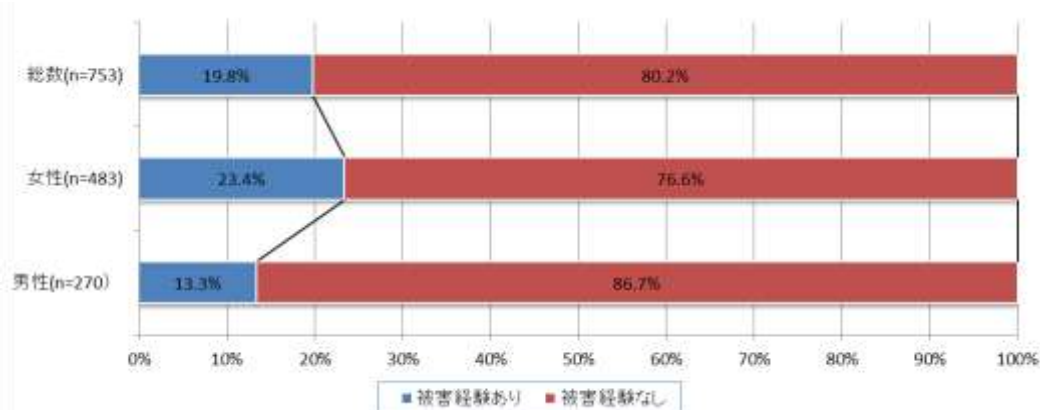
配偶者からの被害を相談しなかった理由 図5

相談するほどのことではないと思った人が、約2人に1人

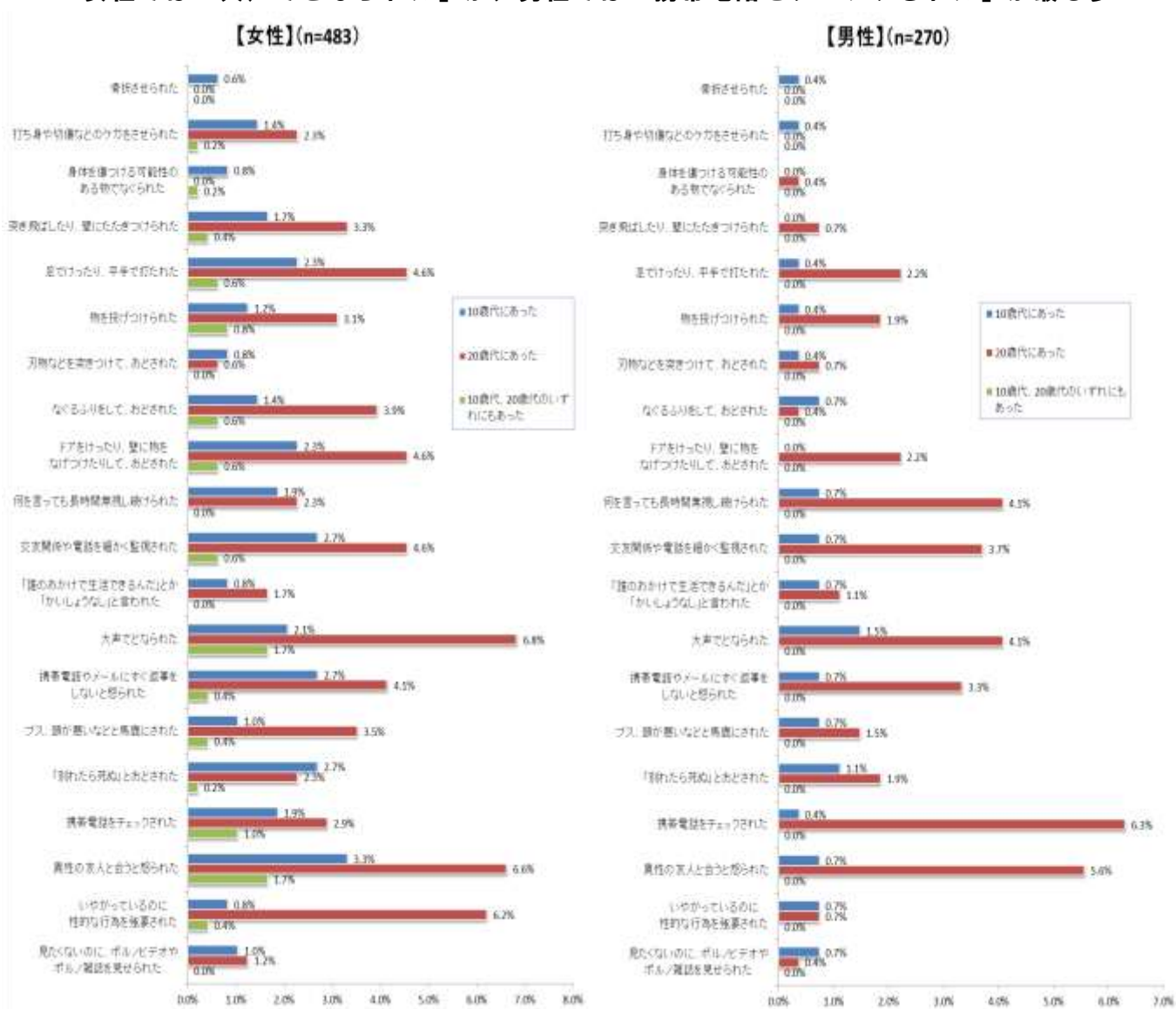


交際相手からの被害経験の有無 図6

約5人に1人は交際相手から被害を受けたことがある

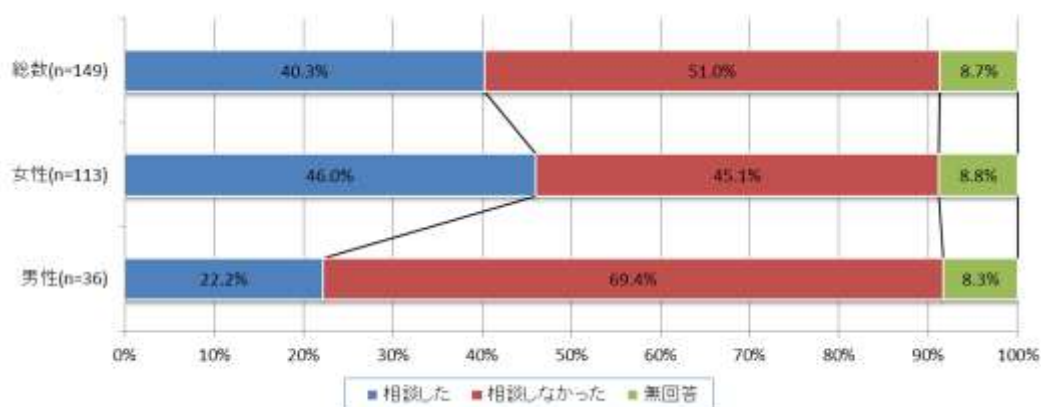


女性では「大声でどなられた」が、男性では「携帯電話をチェックされた」が最も多い



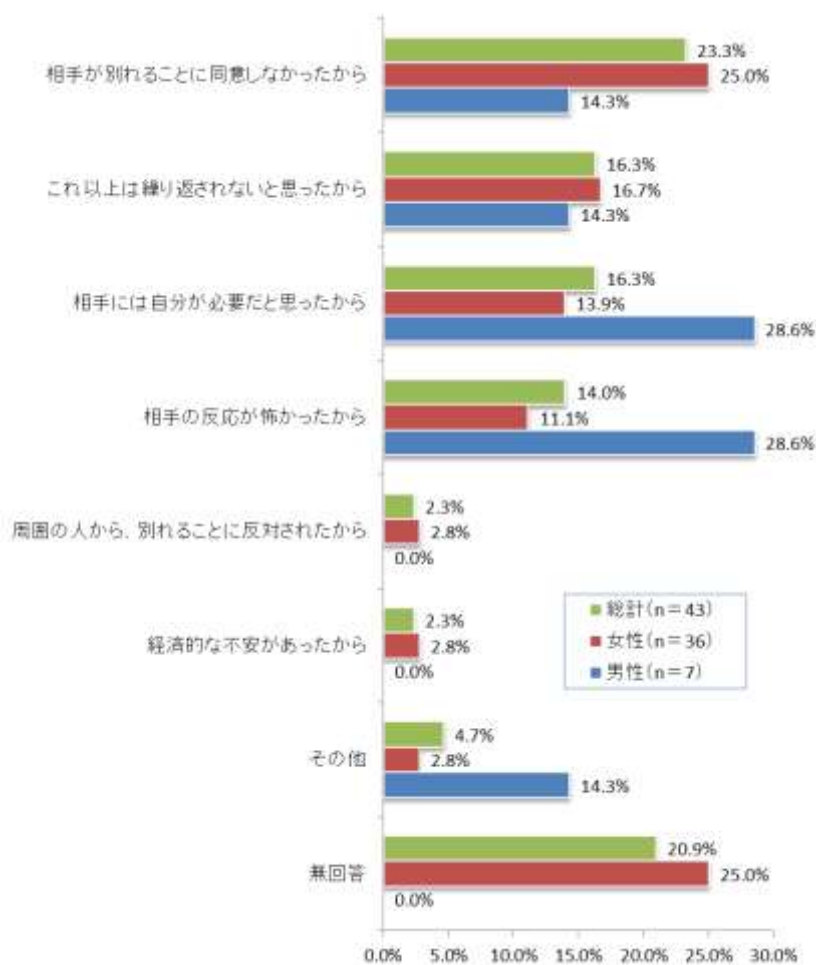
交際相手からの暴力に対する相談の有無 図7

被害を受けた人の約5割はどこ（だれ）にも相談していない



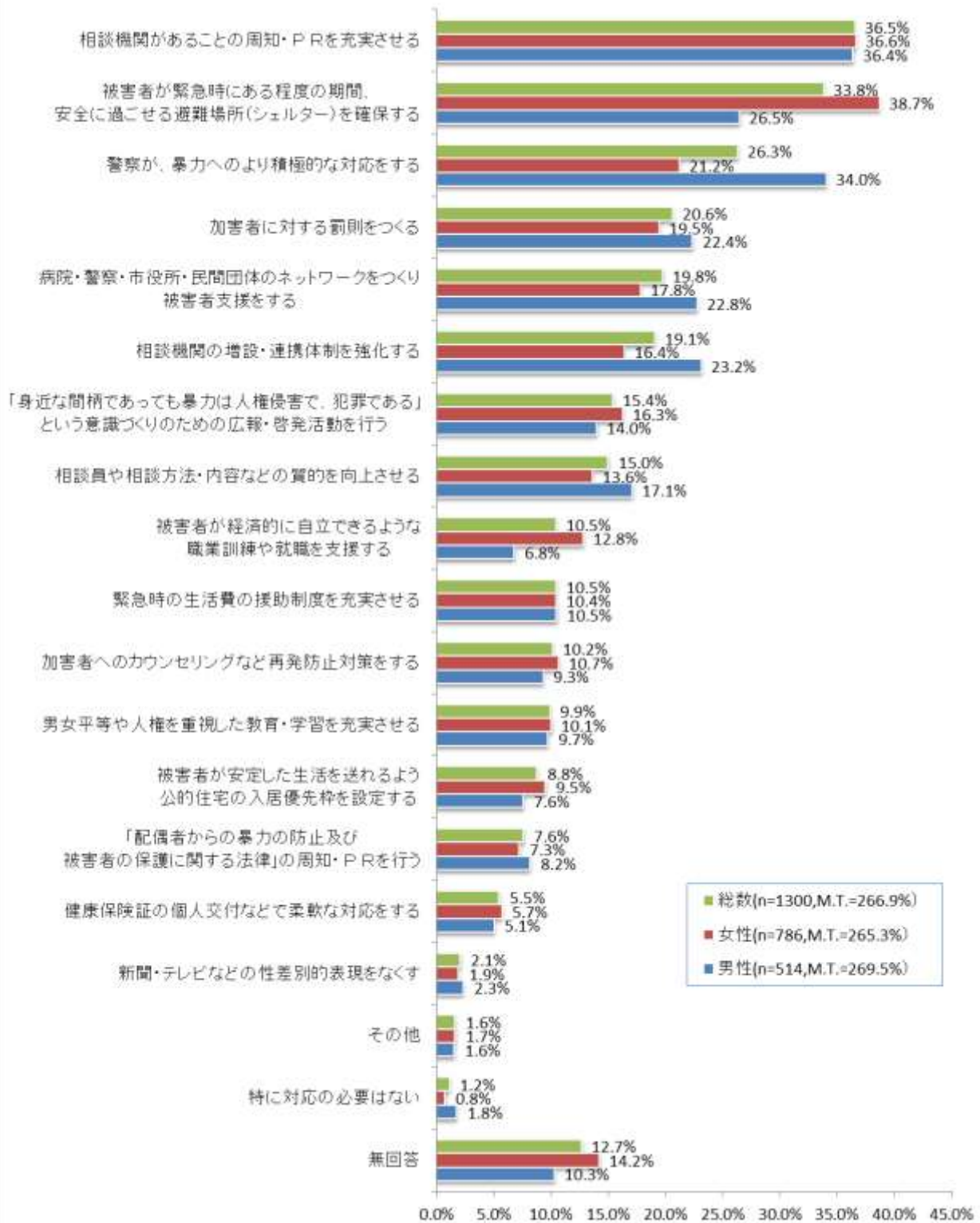
交際相手と別れなかった理由 図8

「相手が別れることに同意しなかったから」が最も多い



公的支援策の必要性（複数回答） 図9

「相談機関があることの周知・PRを充実させる」が最も多く、約3人に1人が必要と感じている



(2) 相談の状況

①静岡市婦人相談員による相談人数（3区合計）

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	
相談者数 (実人員)	396	438	495	642	597	
再 掲	DV相談	189	251	250	337	330
	一時保護	64	33	29	26	20

資料 静岡市福祉総務課調べ

※ 平成 20 年度より 5 年間で、相談件数、相談者数とも約 1.5 倍に増加しています。また、DV 相談に至っては、1.7 倍の増加となっています。

※ 一時保護件数が減少しているのは、DV の相談段階で早期に適切な対応を行ったことや、保護命令の活用により一時保護まで至らなかったためと考えられます。

②女性会館相談室における相談件数（カウンセリング）

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
相談件数 (延べ件数)	2062	1949	2422	2633	2794
うち DV 相談	183	72	178	184	128

資料 静岡市男女参画・市民協働推進課調べ

※ 相談件数の約 1 割弱が DV の相談となっています。

※ DV 相談の内容は、緊急性は低いですが、複合的な悩みを抱える件数が多くなっています。

(3) 本市における課題

DV実態調査等の結果から、次のことが課題として挙げられます。

- ◆図1より、DV防止法について、過半数が「法律成立は知っているが内容をよく知らない」という結果から、市民に対して、DVに関する正しい理解や意識啓発が必要となっています。

- ◆図3より、「DV被害経験がある人」は、約3人に1人で、男性よりも女性のほうが多いことから、その背景には、男女の社会的地位や経済力の格差、固定的な性別役割分担意識や女性軽視など、男女が置かれてきた社会の歴史的・構造的な問題が多くあることも考えられます。

- ◆図4・7より、「DV被害経験がある人」の約5割がどこにも相談していないことから、DVに関する正しい理解とともに、一人で悩むことなく相談機関を利用できるよう相談しやすい窓口が必要となっています。

- ◆図9より、「公的支援策の必要性として、相談機関があることの周知・PRを充実させる」が最も多いことから、相談機関等について広く周知を行い、身近な相談窓口として、より一層の相談機関の充実が必要となっています。

- ◆図9より、特に女性において「公的支援策の必要性として、被害者が緊急時にある程度の期間、安全に過ごせる避難場所を確保する」が最も多いことから、被害者の不安を解消する安全確保の充実が必要となっています。

- ◆図3～5から、DV被害経験があるにもかかわらず、「相談窓口を利用していない」、「相談しなかった理由に相談することではないと思った」ことから、相談窓口情報を入手する機会不足や、被害者自身に自ら受けている暴力が重大な人権侵害であるという認識がないことも考えられます。

3 取り組むべき施策の方向性とその内容

(1) 施策の基本的方向

基本目標1 DVを生み出さない社会づくりの推進

DVを生み出さない社会を実現するためには、DVは、犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害であること、DVが配偶者間だけの個人の問題ではなく、社会全体の問題であることについて、広く理解を促すことが必要です。中には被害者自身が自ら受けている暴力が重大な人権侵害であるという認識がないために、相談に至らない場合もあります。

平成24年のDV実態調査によるとDVの相談窓口として認知されている割合は、「警察」は80.5%、「市役所」は52.5%となっています。DVに対する公的支援の必要性では、「相談機関の周知の充実」が最も求められています。

また、DV防止法の認知度については、過半数が「法律成立は知っているが内容をよく知らない。」と回答していることから、DV対策の基本としてあらためてDV防止法の周知を図る取組は今後一層充実する必要があります。

DVの未然防止の観点からは、あらゆる機会を通じて、子どものころからお互いの人権を尊重することを目的とした道徳教育や人権教育などに取り組む必要があります。再発防止の観点から、加害者対策は重要な施策のひとつですが、加害者は法的視点から見ても様々な類型が存在しています。場合によっては、加害者が更生のための指導を受けているという事実をもって、被害者等に事実と反し加害者が更生したとの錯覚を与える恐れがあるなど対応には慎重な議論が求められます。

さらに、市職員や学校・医療・保健・福祉関係者など職務関係者によるDVへの理解促進は、被害者支援の観点からも大変重要であり、二次被害をなくす上でも、職務関係者に対する研修や資質向上は必要不可欠なものとなります。

① 市民に対する広報・意識啓発の充実

被害者は、加害者からの過度の監視のもと、社会から孤立し、被害者支援情報を入手する機会が制限されていることがあります。あるいは配偶者の収入に頼らざるをえない経済的状況や、子どもの安全や就学の問題など様々な状況により逃げることをためらう場合もあります。

また、被害者自身がDVを受けているという認識がないことや、暴力を振るわれ続けたことによる恐怖感や無力感から相談に至らないこともあります。このことから、市民がDVに気づき、早期に被害者を発見し、関係機関への通報や相談窓口の情報提供を行えるようにする必要があります。

そのために、DV防止法の趣旨や制度を周知し、DVが「犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害である」ことについて正しい理解が得られるよう、また、DVに関する相談窓口の周知につながるよう、ホームページや冊子の発行等広報媒体を活用するとともに、学校・家庭・地域等において、民間企業やNPO法人などの協力を得ながら普及啓発を進めることも必要です。

また、「児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）」において、「児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこ

と」は児童虐待であると定義されています。このことから、子どもへの虐待・女性に対する暴力を生み出さない社会づくりに向け、オレンジリボンキャンペーンやパープルリボンキャンペーンを行うなど、積極的に啓発していくことが重要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
1 啓発講演会等の開催	DV防止や人権啓発に関する講座、講演会等を開催します。	男女参画・市民協働推進課 (福祉総務課)
2 啓発運動の実施	DVや児童虐待等を予防・根絶するための意識啓発キャンペーンを実施します。 (オレンジ&パープルリボンキャンペーン)	男女参画・市民協働推進課 子ども家庭課

② 暴力の未然防止・再発防止の取組の推進

暴力を未然に防止するためには、あらゆる機会を通して、暴力を用いることなく問題を解決する方法を身につけることが大切です。子どもが自分自身の大切さを自覚するとともに、虐待、暴力行為、いじめ、セクシュアル・ハラスメント等の危機を自分で切り抜けるための知識や方法を学ぶ機会をもつことが重要です。発達段階に応じた保育や教育活動などを通じ、幼児、児童生徒に人権尊重の意識を育む人権教育の充実を図るとともに、男女が、互いに心身の健康について、正しい知識を身につけ、主体的に行動し、自分の健康を管理できるよう、若年層を対象とした教育や啓発が望まれます。

また、DVは交際期間から始まっていることも多いことを踏まえ、若年層に対して、お互いを尊重し、信頼に基づく関係を築けるよう、冊子の発行やホームページへの情報発信等を通して、デートDVに関する効果的な啓発が必要です。

一方、暴力の発生原因の背景となる家庭生活等への対応も欠かせません。ワーク・ライフ・バランスの推進をはじめ、育児・介護等生活に対する社会的支援や学校・職場等におけるメンタルヘルスなど精神保健福祉の向上等も望まれます。

さらに、再発防止の視点から、加害者更生の施策に関する国の調査研究の推進状況を踏まえながら、男性被害者はもとより男性加害者への対応も視野に入れた男性相談のあり方についても、更なる検討が求められます。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
3 若者を対象としたデートDV防止対策	「女性に対する暴力をなくす運動」を実施するとともに、若者対象にデートDV防止の啓発を進めます。	男女参画・市民協働推進課
4 「静岡版道徳教育」の推進	すべての学校で地域人材を活用した道徳授業の実施など、人間としての在り方・生き方を考える実践的な道徳教育を行います。	学校教育課

③ 職務関係者のDVへの理解促進

DVは外部からその発見が困難な家庭内で行われるため潜在化しやすく、しかも加害者に罪の意識が薄いという傾向にあり、被害が深刻化しやすいといわれています。職務関係者は、DVの特性等を十分理解した上で、被害者の立場に配慮して職務を行うことが必要となります。特に被害者と直接接する場合は、被害者がDVにより心身とも傷ついていることに十分留意します。

職務関係者においては、被害者に対し不適切な対応をすることで、被害者に更なる被害（二次被害）が生じることのないよう、職場や学校等で研修及び啓発を実施し、資質向上に努めることが必要です。

さらに、被害者が安心して支援を受けることのできる環境の整備につなげるとともに、関係機関がDVの問題について共通の認識を持つなど、連携強化が重要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
5 保育士に対する研修の充実	各種研修会において、男女共同参画の考えを実践します。	保育課
6 教職員研修の充実	教職員研修の中に、「人権意識の向上」等に関する内容を盛り込みます。	教育センター

基本目標 2 身近で相談できる体制の整備

被害者がDVから抜け出し、安全に生活していくためには、被害者への支援等に関する情報を適切に入手し、それを活用することが重要となります。しかし、DVにより、被害者は孤立し、利用できる支援等に関する情報を入手する機会も制限されている場合もあります。

また、被害者自身に、自ら受けている暴力が重大な人権侵害であるという認識がないために、相談に至らないこともあります。平成24年DV実態調査によると、「配偶者及び交際相手からの被害経験がある人の約5割がどこにも相談していない」ことが明らかとなっています。

このため、DVは重大な人権侵害であり、被害者だけで悩むことなく相談窓口を利用するよう、広く周知することが必要となります。その際には、今後の生活についての被害者自身の意思が固まっていない段階であっても、早期に相談窓口を利用し、様々な支援に係る情報等を得るよう呼び掛けることが望ましいと考えられます。

また、被害者には、女性だけでなく男性や高齢者、障がいのある人なども含まれているため、それぞれの状況に応じた相談への対応が求められます。特にDVのある家庭では、子どもへの虐待が行われている場合もあることや、DVを目撃した子どもの心身に及ぼす影響は深刻であることから、関係機関と十分に連携を図っていきます。

さらに、災害時における避難所生活等において、平時と同様に安心して相談できる体制の確保を行うなど、防災担当課など関係部局と連携も必要です。

④ 相談体制の強化

DV防止法により、売春防止法に規定される婦人相談員が被害者支援を行うことができるようになりましたが、本市では、これまで婦人相談員として「女性相談員」を各区福祉事務所に配置し、女性相談を実施するとともに被害者支援を行ってきました。また、静岡市女性会館（以下「女性会館」という。）では、女性のための相談室の開設や、DVに関する各種講座を実施してきました。

しかしながら、近年は、相談件数の増加に加え、相談内容が複雑かつ深刻となっていることを踏まえ、市民にとって相談しやすく迅速に対応できる相談体制が不可欠となります。

そこで、身近な相談機関でワンストップによる迅速な支援を行う必要があることから、本市に配偶者暴力相談支援センターの機能を整備し、継続的な相談、手続きの一元化、自立支援など、ワンストップ支援を担うことができるよう、よりきめ細やかで迅速な被害者支援を行うことが極めて重要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
7 女性向けカウンセリングの実施	女性相談窓口において、セクハラ、DV等の被害者へのカウンセリングを実施します。	男女参画・市民協働推進課
8 女性（婦人）相談員による女性相談・保護の実施	女性（婦人）相談員による女性相談・保護を実施します。	各区福祉事務所生活支援課 (福祉総務課)
9 配偶者暴力相談支援センター機能の整備	関係機関と連携し、配偶者暴力相談支援センター機能を果たす体制を整備します。	福祉総務課 (男女参画・市民協働推進課)

⑤ 子どもに対する支援の充実

DVが子どもの面前で行われることは児童虐待に当たります。直接子どもに対して向けられた行為でなくても、心理的虐待として子どもの生育に深い影響をもたらすなど、DVは児童虐待（身体、性的、ネグレクトも含む）と密接に関係しています。

児童相談所においては、医学的または心理学的な援助を必要とする子どもに対しては、精神科医や児童心理司等が連携を図りながら、個々の子どもの状況に応じてカウンセリング等を実施する必要があります。

また、被害者が地域での生活を始めた場合でも、子どもが安心して安定した生活ができるよう、継続的な支援を行うことも望まれます。学校や各区福祉事務所等と相互に連携を図り、子どもへの支援の充実に努めることが必要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
10 児童個別相談の実施	家庭その他からの相談に応じ児童が有する問題や真のニーズ等を適確に捉え、個々の児童や家庭に最も効果的な処遇を行う中で児童の福祉を図り、その権利を保護します。	児童相談所
11 子ども若者相談センターの運営	0歳から39歳までの子ども・若者に関する相談を受け付けます。	青少年育成課

⑥ 多様な被害者への配慮

被害者に対する支援を行う際に注意すべきことは、被害者の国籍、障がいの有無等を問わずプライバシーの保護、安全の確保、受容的な態度で相談を受けること等、被害者の人権に配慮した対応を行うことが必要です。被害者が、高齢者、障がいのある人、外国人、男性、性的マイノリティ等であることにより支援を受けにくいということにならないよう、情報提供、相談の対応等、それぞれの被害者の状況に応じた配慮を行うことが重要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
12 地域包括支援センターによる総合相談等の実施	高齢者の総合相談窓口として多様な相談に対応する中で、高齢者の人権や財産を守るための成年後見制度の紹介や虐待の早期発見防止などに対応します。	高齢者福祉課
13 障害者虐待防止対策支援	障害者虐待の防止、養護者に対する支援等を促進、障害者の権利利益を擁護します。	障害者福祉課

基本目標 3 被害者の安全確保の徹底

被害者とその子ども等の安全確保は第一の優先課題であり、関係機関は連携・協力しながら、それぞれに求められる役割を的確に果たす必要があります。

DV防止法では、被害者等の一時保護を婦人相談所の責務としており、県内では静岡県女性相談センター（婦人相談所）が一時保護業務を担っています。

また、配偶者暴力相談支援センターにおいては、被害者及び同伴家族の緊急時における迅速かつ適切な安全確保が求められており、現在、本市では、静岡県女性相談センターや警察等と連携し、一時保護時の同行支援などを必要に応じて行っています。

被害者は、命の危険を感じるほどの暴力を受ける場合や、着の身着のまま家を飛び出し、助けを求めてくることもあり、被害者を連れ戻そうとする加害者も少なくありません。そこで、配偶者暴力相談支援センター、女性相談窓口、警察等関係機関の間で、連絡体制や加害者からの追跡への対応等について、情報の共有と情報管理の徹底に努める必要があります。

さらに、被害者や被害関係者が他都市から相談に来た場合や市外に転出を求める場合なども、被害者の安全確保を念頭に、市町村または都道府県の枠を越えた関係機関と連携を図りながら、市外における広域的な対応が求められます。

⑦ 緊急時における迅速な安全確保

特に緊急時において、被害者とその子どもや親族等にとって、安全が確保されることは、何よりも重要です。相手の反応が怖かったからという理由で保護命令を申し立てない人や、保護命令制度を知らなかった人も少なくありません。家を出たあとに相手からの追跡や嫌がらせを受ける場合もあり、家を出たあとも被害者の安全が脅かされている現状がうかがえます。このことから、夜間、休日等の閉庁時も含め、被害者等の安全確保を常に考慮することが大切です。

被害者等の緊急時における安全確保に適切に対応するため、静岡県女性相談センター（婦人相談所）や警察など関係機関とのネットワークを構築し、連携をさらに強化していきます。

また、婦人相談員による女性相談窓口などには加害者からの問合せもあることから、被害者と相談員等支援者の安全確保に十分配慮する必要があります。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
14 緊急時における安全確保	日頃の連絡調整等機会を通じ、警察や静岡県配偶者暴力相談支援センターとの連携をさらに強化します。	各区福祉事務所生活支援課
15 一時保護等の支援	被害者の安全確保を図るため、静岡県配偶者暴力相談支援センターと連携し、一時保護先への同行支援を行います。	各区福祉事務所生活支援課

⑧ 被害者及び関係者に関する情報の保護

被害者等の支援にかかわる関係機関では、被害者等の情報管理を徹底させなければなりません。加害者のもとから逃げている被害者の住所や居所はもとより、支援を行う施設や団体の所在地等が、加害者やその関係者に知られてしまうことで、被害者やその同伴する家族の安全を脅かすことがないように、情報の管理には細心の注意が求められます。

国の「基本方針」では、住民基本台帳からの情報に基づき事務の処理を行う部局との連携に努めることを求めています。住民基本台帳閲覧等の制限が設けられている趣旨を踏まえれば、閲覧等の制限の対象となっている被害者の情報の取扱いについては、特に厳重な管理が求められます。関係各課と個人情報の保護を念頭に連携を図り、情報管理の徹底に努める必要があります。

被害者の子どもの安全確保については、加害者への対応方法を明確にし、学校や保育所等との連携を更に強化することが望まれます。

被害者の子どもの就学については、就学事務担当窓口における情報の取り扱いに配慮するほか、転出先の学校や教育委員会では、情報提供の制限等の対応を行うことも必要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
16 住民票の写し等の交付等におけるDV等被害者の保護	DV等被害者の申出により、住民票の写し等の交付等の請求の制限を行います。	区政課 各区戸籍住民課
17 厳重な情報の管理	医療保険、年金など住民基本台帳の閲覧制限の対象となっている被害者について、厳重な情報の管理を行います。	各区保険年金課 (各区戸籍住民課)

⑨ 市域を越えた広域的な対応

相談窓口に来る被害者は、市内の人に限りません。被害者や被害関係者が他都市から相談に来た場合や相談者が市外に転出を求める場合なども、被害者の安全確保を念頭に、市町村または都道府県の枠を越えた関係機関と連携を図りながら、市外における広域的な対応が求められます。

また、被害者に対する加害者からの追及が激しい場合は、市町村または都道府県の枠を越えた関係機関の広域的な連携が必要になる場合も予想されます。こうしたことを想定して、あらかじめ、近隣の地方公共団体と連携について検討も必要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
18 市域を越えた被害者対応	DV被害者の安全確保を念頭に、市外の転出入に適切に対応します。	各区福祉事務所生活支援課 (各区戸籍住民課)

基本目標 4 被害者の自立支援の充実

被害者が自立して生活しようとする際には、就業機会の確保、住宅や生活費の確保、子どもの就学の問題等、複数の課題を同時に抱えており、それらを解決する関係機関等は多岐に渡っています。被害者に対しては、DV防止法による一時保護等を通じて、当面の安全を確保した上で、住民基本台帳事務における支援措置など、被害者等の情報の管理に留意し、複数の課題を解決しながら、自立した生活につなげていくことが必要です。

本市でも、福祉事務所等関係機関において被害者の自立に向けた支援を行っており、今後とも、それらの機関が認識を共有しながら、連携を図り、被害者の地域生活を継続的に支援することが極めて重要です。

また、被害者が自立した生活を送るためには、DVにより心身に受けたダメージからの回復が不可欠であるとともに、併せて、同伴する子どもの心理的安定が被害者の自立生活にあたって重要となることから、子どもの心身の回復に向けた取組も必要となります。

さらに、DVと関係の深い子ども虐待や高齢者・障害者虐待等についても日常業務において関係機関と緊密な連携がとれるようにするとともに、既存のネットワークを通じて、被害者の抱える複雑多岐にわたる問題に対処していくことが求められます。

⑩ 心身の回復に向けた支援

DVは、被害者とその子ども及び親族に対して心身ともに大きな影響を与えます。加害者から離れ、自立した社会生活を営むことが可能となっても、本人や同伴家族の心理的ダメージは、長期に渡り、心身に様々な影響を及ぼすと考えられています。被害者の中には、PTSD（心的外傷後ストレス障害）やうつ病を患っている人も多いため、医療機関や心の健康に関する相談、専門医等による専門相談の紹介を行うなど、被害者が地域で生活を送りながら身近な場所で支援を受けることができる体制が必要となります。

また、被害者の心身の回復には、被害者同士が体験や感情、悩みを共有し、情報を交換し合う自助のためのグループに参加することも有効とされていることから、自助グループ等の活動に関する情報提供や、グループの形成・継続に対する支援、地域での居場所づくりや見守り支援などを通して、継続的なサポート体制を検討することも望まれます。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
19 女性向けカウンセリングの実施	女性相談窓口において、セクハラ、DV等の被害者へのカウンセリングを実施します。（再掲）	男女参画・市民協働推進課
20 精神保健福祉相談の実施	精神疾患に関する悩み、事件や事故等によるこころの問題について、精神保健福祉相談を実施します。	こころの健康センター

⑪ 生活基盤を整えるための支援

被害者が生活を再建し自立するためには、住宅の確保や就業、生活費や子どもの就学の問題など生活全般に渡る幅広い支援が必要となります。あわせて、被害者は、離婚や子どもの親権の確保など、法的問題を抱えているケースもあります。被害者の状況やニーズに応じて各種制度を活用することができるよう適切な情報提供や手続き支援を行うとともに、自立促進のための施策など、それぞれの状況に応じたきめ細かな継続的な支援が求められています。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
21 生活の支援	生活に困窮する方に対し、困窮の程度に応じて必要な保護を行い、健康で文化的な最低限の生活を保障します。	各区福祉事務所生活支援課
22 市営住宅の一時入居支援	DV被害者を市営住宅に一時的に入居できるよう配慮します。	住宅政策課

⑫ 多様な被害者への支援

被害者には、女性だけでなく男性や高齢者、障がいのある人、子どもや親族なども含まれていることから、それぞれの状況に応じた対応が求められます。

被害者に子どもがいる場合は、その子どもがDVを目撃、または、直接的に暴力を受けたことなどにより、心理的な影響を受けていることがあるため、専門機関などと連携して子どもの心のケアを充実させていくことが必要となります。子どもは、転居や転校をはじめとする生活の変化等により、大きな影響を受けやすいため、学校、保育所等の関係機関と連携し、教育や保育に配慮した支援が不可欠であり、それが被害者の自立にもつながります。

また、子どもころから、DVは人権侵害であると認識し、自己肯定感・自己信頼感をもち、自分も相手も大切に感じるという教育も重要です。

一方、高齢者、障がいのある人、外国人に加え、子どもなどの同伴家族に障がいがある場合など、それぞれの被害者等の状況に配慮して、関係機関や団体と連携して支援することが必要となります。

特に高齢者や障がいのある人の被害者については、外部からその発見が困難なケースもあるため、様々な相談や福祉サービスを通じて被害者の発見に努めることも重要です。

外国人被害者は、言葉や文化の違いにより社会の中で孤立しやすく、相談窓口についても分かりにくい状況にあることに加え、実際の支援にあたって、在留資格、法的手続き、自立支援策など、対応が複雑で困難な状況があります。こうしたことから、国際交流や外国人支援を行っている民間団体と連携し、相談、支援を行うことが必要です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
23 母子生活支援施設等への入所	母子生活支援施設等の入所や調整を行い、母子家庭の自立促進のために生活を支援します。	子ども家庭課 各区福祉事務所保育児童課
24 DV被害者に子どもがいる場合の対応	DVは子ども虐待と密接に関係しているため、児童相談所及び各区福祉事務所保育児童課と相互に連携して支援します。	児童相談所 各区福祉事務所保育児童課

基本目標 5 推進体制の構築

DV被害者に寄り添い、本人の意思を尊重した適切な支援を行うためには、課題解決にかかわる関係部局との連携強化のみならず、国及び静岡県、警察、医療機関、民間団体など関係機関が共通認識を持ちながら、緊密に連携して取組み、継続した支援を推進することが必要です。

また、DVについての理解を深める様々な研修を通じて、被害者への更なる被害（二次被害）が生じることのないよう職務関係者等の人材育成や資質向上を図ることは、きめ細やかでニーズに合致した適切な被害者支援に繋がります。

さらに、DV防止施策に資するため、加害者の更生や被害者の心身の健康を回復させるための方法等に関する調査研究を進めることも不可欠です。

なお、国の第3次男女共同参画基本計画においては、加害者更生プログラムについて、その効果的な実施方法を含めた調査研究を実施するとされていることから、国における加害者更生プログラムの調査研究の推進状況を把握することが同時に大切です。

⑬ 関係機関相互の連携強化

DV防止及び被害者の保護・自立に向けた支援施策は広範囲におよび、関係機関、団体も多岐にわたります。支援の中核的な機関である配偶者暴力相談支援センターや婦人相談員と、警察、学校、弁護士、医療・保健・福祉関係者などの支援者等との連携は、DVを受ける生活からの脱却と、自立した生活の安定化に寄与するため、日頃から連携を密にするとともに、相互に支援を行うことが重要です。

そこで、市の関係各課及び女性会館をはじめ、警察、静岡県の関係機関、民間団体などで構成する連絡会議等の設置を通して、相互の情報交換による共通理解のもと、庁内外の連携強化に努め、効果的にDV防止施策を進める必要があります。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
25 関係機関によるネットワーク構築	警察、静岡県の関係機関、弁護士、医療機関、民間支援団体などDVに関する機関との情報交換・連携を図ります。	男女参画・市民協働推進課 福祉総務課 (各区福祉事務所生活支援課)
26 庁内組織の連携強化	DVに関係する市関係各課による定期的な情報交換・連携を図ります。	男女参画・市民協働推進課 福祉総務課 各区福祉事務所生活支援課

⑭ 職務関係者に対する教育の充実

被害者の支援を担う人材が、DVの特性や被害者の立場を十分理解していることは、きめ細やかでニーズに合致した自立支援を行っていく基盤となります。そのため関係機関においては、被害者の支援に係る人材の育成及び資質の向上について、職務関係者に対する研修等を通じ、十分配慮することが必要となります。

DVに続く二次被害を防止するためにも、被害者支援現場からの報告や講演などDVに関する研修を実施するとともに、支援者等の二次受傷などを防ぐための研修を継続して実施していくことも必要です。

また、静岡県配偶者暴力相談支援センターと連携して、婦人相談員の専門性の確保と向上のための実務研修等を実施するなど、相談員へのスーパーバイズ機能も欠かせません。

さらに、学校や保育所等における対応では、子どもと日常的に接することが多い教員、養護教諭、スクールカウンセラー等の教育関係者や保育士等の保育関係者に対して、児童虐待に関する留意事項に加え、DVの特性、子どもや被害者の立場や配慮すべき事項等について、研修等の場を通じて周知徹底を図ることが必要となります。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
27 啓発講演会等の開催	DV防止や人権啓発に関する講座、講演会等を開催します。（再掲）	男女参画・市民協働推進課 （福祉総務課）
28 教職員研修の充実	教職員研修の中に、「人権意識の向上」等に関する内容を盛り込みます。（再掲）	教育センター

⑮ DV防止に関する調査研究の実施

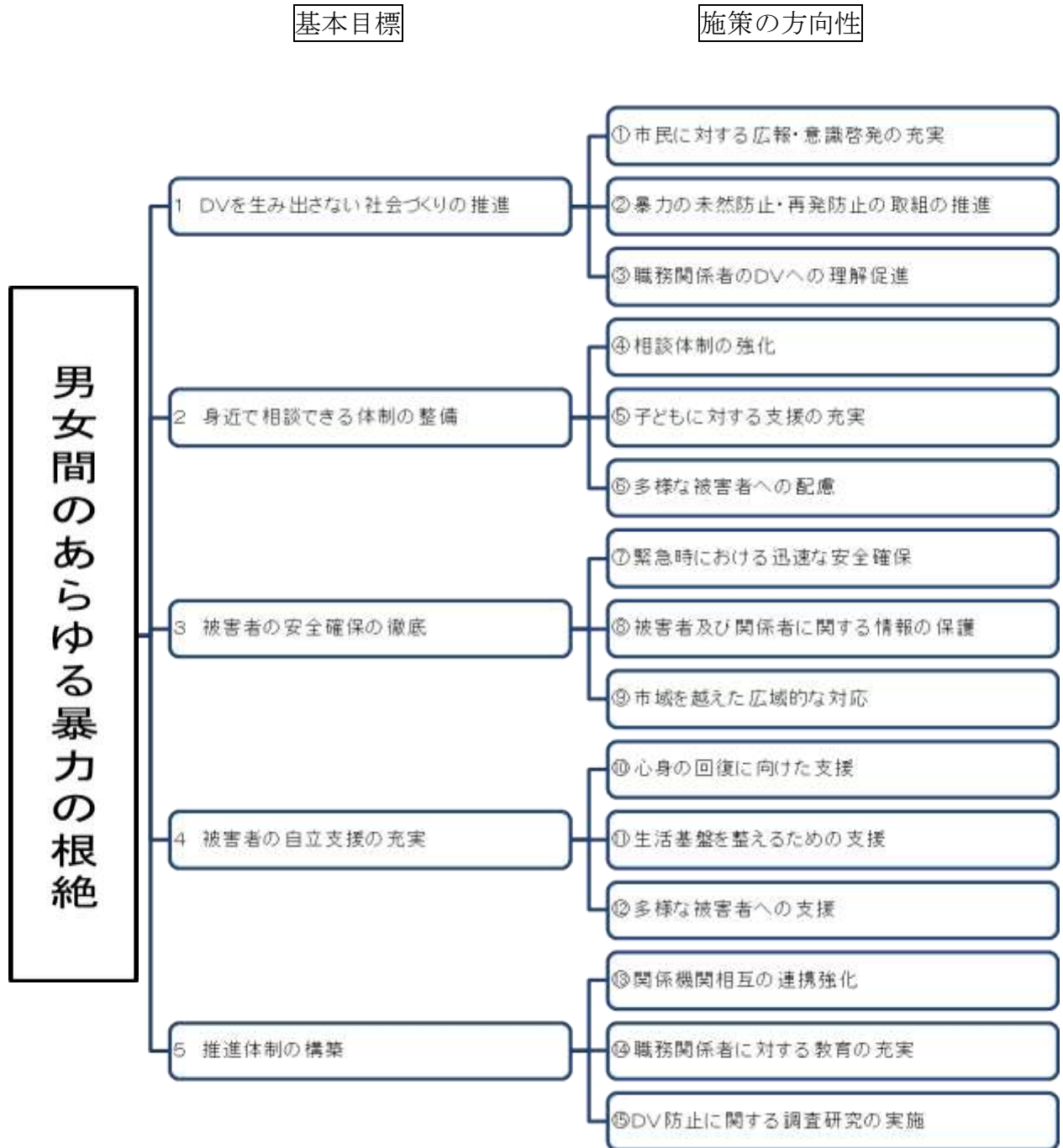
配偶者からの暴力の防止及び被害者の支援に関する施策の推進のために、適宜、本市におけるDVの現状や市民の意識、DV被害者支援団体の活動、DVが被害者やその子どもに与える影響等を把握するとともに、各種資料の収集に努めることが重要です。

また、DV防止に向けて、加害者の更生のための取組も不可欠です。国の第3次男女共同参画基本計画においては、DV加害者更生の取組として、加害者更生プログラムについて、その効果的な実施方法を含めた調査研究を実施するとされています。このことから、DV加害者への対応については、国における加害者更生プログラムの調査研究の状況把握に努めるとともに、必要な法制度の整備等が行われるよう国への要望を検討することも大切です。

【主な取組】

事業名	内容	所管課（その他関係課）
29 加害者対応についての調査・研究	国における加害者更生プログラムの調査研究や他自治体の取組についてその推進状況の把握に努め、施策のあり方について研究及び情報収集に努めます。	男女参画・市民協働推進課
30 国・県・政令指定都市等の情報収集	国、県、政令指定都市等からの情報を収集し、対策を研究します。	男女参画・市民協働推進課

(2) 体系図



4 施策の総合的な推進のために必要な事項

(1) 次期男女共同参画行動計画との整合

DV被害者の多くが女性であり、その背景には固定的な性別役割分担意識など社会的・構造的な問題により、男女共同参画社会の実現の妨げの一因となっています。このことから、DVに関する基本計画を第3次静岡市男女共同参画行動計画の重点施策のひとつとして、一体的に推進していきます。

(2) 的確な情報の収集・発信の充実

計画の推進に当たっては、施策の立案や実施におけるプロセスの透明性を確保するとともに、市民の参画を得て施策を推進することが重要です。DV防止施策に関して、迅速かつ的確な情報の収集・発信に努めるとともに、様々な機会において、DVに関する意見等の把握・反映に努めていきます。

(3) 新たな検討が必要となる事項への対応

今後における施策等の着実な実施を中心にDV防止に取り組む必要があります。一方で、急速に変化する社会の中で、DVに関する課題も日々刻々と変化しています。こうした状況に対応するためには、今後の計画期間においても、国等の動向に注視し、必要に応じて新しい課題に対する検討を進め、適時適切な対応を行っていきます。

(4) 進捗状況の点検及び計画の見直し

計画を効果的かつ着実に実施するためには、事業量指標ではなく、成果指標やモニタリング指標などによる定期的な点検とその結果のフィードバックが不可欠であるため、毎年度、自らの施策の進捗状況について、点検を行います。

計画の年度ごとの成果の進捗状況等については、広く市民に公表する必要があります。具体的取組については、別途、実施計画を策定し、点検・評価等含め、公表していきます。

また、今回の計画は、今後取り組むべき具体的方策について示すものであることから、中間年度を目途に見直しを行い、改訂を検討します。なお、特段の事由がある場合には、計画期間の途中に見直しを行い、その一部を改訂することもあります。

5 数値目標等

計画の達成度や進捗状況を定期的に把握・評価し、効果的に計画を推進するため、成果指標及びモニタリング指標を設定します。

(1) 成果指標

項目	現状値 (H24 年度)	目標値 (H34 年度末)
①DV相談窓口の周知度	52.3%	100%
②夫婦間における「足でけったり、平手で打たれる」、「なぐるふりをして、おどされる」を暴力として認識する市民の割合	(足でけったり、平手で打たれる) — (なぐるふりをして、おどされる) —	100%
③DV防止法の認知度	73.6%	100%

※目標値②③は、国の第3次男女共同参画基本計画（第9分野）と同様。

※①は市役所におけるDV相談窓口とする。（現状値：4頁図2）

※②は各々の項目を市民意識調査等により把握予定。

※③は法律の成立を知っている人の総計。（現状値：4頁図1）

【成果指標①～③設定の背景】

- ①DV被害者がDVを受けることなく安全な生活を送るためには、身近にある窓口にご相談することが解決への第一歩となることから、指標として設定します。（「(静岡県) 男女間における暴力に関する調査（平成24年度）」）
- ②DVは犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害であるにもかかわらず、DVと認識されていない暴力の存在が、被害を潜在化させ、問題を深刻化させてきた状況を踏まえ、指標として設定します。（今後、市民意識調査等により把握予定）
- ③「DV防止法」はDVに関する相談、保護、自立支援等DV防止及び被害者の保護を図るための法律であることから、その認知度を計画全体の取組として計る指標として設定します。（「(静岡県) 男女間における暴力に関する調査（平成24年度）」）

(2) モニタリング指標

項目	現状値	担当課等
①女性会館相談室 相談件数 (延べ件数)	2,794 件 (H24 年度)	市男女参画・市民協働推進課調べ
②各区女性相談 相談人数 (実人員)	597 人 (H24 年度)	市福祉総務課調べ
③静岡県警で受理したDVに関する相談件数	543 件 (H24 年)	静岡県警察本部生活安全企画課調べ
④静岡県配偶者暴力相談支援センターにおけるDVを原因とする一時保護件数	58 件 (H24 年度)	静岡県女性相談センター調べ
⑤静岡地方裁判所管内における静岡県の保護命令発令件数	82 件 (H24 年度)	最高裁判所調べ
⑥配偶者間の暴力(殺人・暴行・傷害)の検挙件数(静岡県)	50 件 (H24 年)	静岡県警察本部生活安全企画課調べ

【モニタリング指標設定の背景】

取り組む各事業の進捗状況と併せ、静岡市のDV被害状況を把握するために指標として設定します。

(モニタリング指標：目標値の設定が困難であるが、定期的に指標を追って推移を見守る必要があるものについて定める指標のこと。)

静岡市男女共同参画推進条例

平成15年4月1日

条例第112号

改正 平成16年12月22日条例第98号

平成19年12月12日条例第90号

目次

前文

第1章 総則(第1条—第15条)

第2章 男女共同参画の推進に関する基本施策(第16条—第23条)

第3章 静岡市男女共同参画審議会(第24条—第31条)

第4章 雑則(第32条)

附則

日本国憲法には、個人の尊重と法の下での平等がうたわれており、男女平等の実現に向けては、昭和50年の国際婦人年から今日まで、世界では国際連合を中心として、女性に対する差別をなくす目的で作られた女子差別撤廃条約が採択されるなど、積極的な取組が行われてきました。

日本でも、男女が公平な労働条件の下で働くことを目指した男女雇用機会均等法や男女が平等な立場で生活することを旨とした男女共同参画社会基本法が制定されるなど、男女平等を実現するための法律や制度がしだいに整備されてきました。

私たちのまち静岡市でも、女性行動計画や男女共同参画推進計画を策定するとともに、女性会館を開館するなど女性政策を推進し、男女が平等な立場で、いきいきと生活できる社会づくりに向けて努力をしてきました。

こうした様々な取組にもかかわらず、性別で役割をきめつけてしまう考え方や、これに基づく社会のしきたりには根強いものがあり、多くの市民が不平等だと感じています。男女がお互い人として、どう生き、どう働くかを自由に決めることができ、互いに尊重しあう質の高い豊かな生活を送るためには、男女があらゆる分野で共に参画していくことが欠くことのできない緊急の課題となっています。

こうした世の中の動きを踏まえ、静岡市では一人ひとりが個性と能力を発揮し、責任を分かち合う男女共同参画社会づくりに、自分たちの暮らす地域全体で取り組んでいくために、市民の参画により、この条例を制定します。

第1章 総則

(目的)

第1条 この条例は、男女共同参画の推進についての基本理念を定め、市、市民及び事業者の責務を明らかにし、並びに男女共同参画に関する基本施策を定め、これを総合的かつ計画的に推進することにより、豊かで活力ある男女平等な社会を実現することを目的とする。

(定義)

第2条 この条例において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

- (1) 男女共同参画 男女が、性別にかかわらず、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野の活動に参画する機会が確保されることにより、等しく政治的、経済的、社会的及び文化的利益を受け、かつ、共に責任を担うことをいう。
- (2) 積極的改善措置 前号に規定する機会に係る男女間の格差を改善するため、必要な範囲内において、男女のいずれか一方に対し、当該機会を積極的に提供することをいう。
- (3) セクシュアル・ハラスメント 性的な言動により相手方を不快にさせ、若しくはその者の生活環境を害し、又は性的な言動に対する相手方の対応によりその者に不利益を与えることをいう。
- (4) 市民 市内に居住し、通学し、通勤し、又は市内で活動する者をいう。
- (5) 事業者 個人又は法人にかかわらず、市内において事業を行うすべてのものをいう。

(男女の人権の尊重)

第3条 男女共同参画の推進は、男女が人としての尊厳が重んぜられること、直接又は間接にかかわらず性別により差別した取扱いを受けないこと、個人として能力を発揮する機会が確保されること、人権侵害である男女間の身体的、精神的、経済的、性的暴力等あらゆる暴力が根絶されることその他の男女の人権が尊重されることを旨として、行われなければならない。

(社会における制度又は慣行についての配慮)

第4条 男女共同参画の推進に当たっては、性別による固定的な役割分担等を反映した社会における制度又は慣行が、男女の自由な活動の選択を妨げることのないよう配慮されなければならない。

(政策等の立案及び決定における共同参画の機会の確保)

第5条 男女共同参画の推進に当たっては、男女が社会の対等な構成員として、市、事業者その他団体における政策又は方針の立案及び決定に共に参画する機会が確保されなければならない。

(家庭生活と職業生活その他の社会における活動の両立)

第6条 男女共同参画の推進に当たっては、男女が、相互の協力と社会の支援の下に、子の養育、家族の介護その他の家庭生活における活動について、家族の一員として責任を持ち、その役割を円滑に果たすとともに、職業生活その他の社会における活動を行うことができるようにしなければならない。

(世界的視野の下での男女共同参画)

第7条 男女共同参画の推進は、世界の国々で取り組むべき目標であると認識し、広く世界に向けた視野の下に、積極的に行われなければならない。

(男女の互いの性の尊重と生涯にわたる健康への配慮)

第8条 男女共同参画の推進に当たっては、男女が、互いの性を尊重するとともに、妊娠、出産その他

の生殖と性に関し、自らの決定が尊重されること及び生涯にわたる心身の健康に配慮されなければならない。

(市の責務)

第9条 市は、第3条から前条までに規定する男女共同参画の推進についての基本理念(以下「基本理念」という。)にのっとり、男女共同参画の推進に関する施策(積極的改善措置を含む。以下「男女共同参画推進施策」という。)を総合的に策定し、実施するとともに、その他の施策についても、男女共同参画の視点に立って実施する責務を有する。

- 2 市は、男女共同参画推進施策の策定及び実施に当たっては、財政上の措置及び実施体制の整備に努めるものとする。
 - 3 市は、男女共同参画を率先して推進し、当該推進に当たっては、市民及び事業者と連携し、及び協力するとともに、市民及び事業者が男女共同参画の推進のために行う活動の支援に努めるものとする。
- (市民の責務)

第10条 市民は、性別による固定的な役割分担意識に基づく社会における制度及び慣行を改善し、家庭、職場、学校、地域その他の社会のあらゆる分野における男女共同参画を推進するよう自ら努めなければならない。

- 2 市民は、市が実施する男女共同参画推進施策に協力するよう努めなければならない。
- (事業者の責務)

第11条 事業者は、基本理念にのっとり、その事業活動において男女共同参画を推進し、就労者の職業生活と家庭生活における活動の両立を支援するため、就労環境を整備するよう努めなければならない。

- 2 事業者は、就労者に対し、就労に関して男女共同参画の推進に役立つ情報を提供するよう努めなければならない。
 - 3 事業者は、市が実施する男女共同参画推進施策に協力するよう努めなければならない。
- (性別による権利侵害の禁止)

第12条 何人も、あらゆる場において、性別により差別した取扱いをしてはならない。

- 2 何人も、あらゆる場において、セクシュアル・ハラスメントを行ってはならない。
- 3 何人も、夫婦間を含むすべての男女間において、身体的、精神的、経済的、性的暴力等あらゆる暴力行為を行ってはならない。

(地域における男女共同参画の実現)

第13条 何人も、地域における団体の活動において、男女共同参画の実現を図るよう努めなければならない。

(教育の場における男女共同参画の推進)

第14条 何人も、家庭教育、職場教育、学校教育、社会教育その他の教育の場において、男女共同参画を推進するよう努めなければならない。

(公衆に表示する情報の表現への配慮)

第15条 何人も、公衆に表示する情報において、性別による固定的な役割分担、セクシュアル・ハラスメント及び男女間の暴力行為を助長する表現その他男女共同参画の推進を妨げる表現を用いないよう努めなければならない。

第2章 男女共同参画の推進に関する基本施策

(行動計画)

第16条 市長は、男女共同参画推進施策を総合的かつ計画的に実施するため、男女共同参画の推進のための行動計画(以下「行動計画」という。)を策定する。

2 行動計画は、次に掲げる事項について定めるものとする。

(1) 総合的かつ長期的に講ずべき男女共同参画推進施策の大綱

(2) 前号に掲げるもののほか、男女共同参画推進施策を推進するために必要な事項

3 市長は、行動計画の策定に当たっては、第24条の静岡市男女共同参画審議会へ諮問し、かつ、市民の意見を聴かななければならない。

4 市長は、行動計画を策定したときは、速やかにこれを公表するものとする。

5 前2項の規定は、行動計画の変更について準用する。

(進ちょく状況の公表)

第17条 市長は、各年度における行動計画の進ちょく状況を公表するものとする。

(調査研究)

第18条 市は、男女共同参画推進施策を策定し、かつ、実施するため、必要な調査及び研究を行うものとする。

(情報提供及び広報活動)

第19条 市は、男女共同参画の推進について、市民及び事業者の理解を深めるために、あらゆる機会を通じて、情報を提供し、及び広報活動を行うよう努めるものとする。

(研究機関等との連携等)

第20条 市は、男女共同参画を推進するため、研究機関及び教育機関と連携し、及び協力するよう努めるものとする。

2 市は、男女共同参画を推進するため、民間の団体と連携し、及び協力するとともに、当該民間の団体が男女共同参画の推進のために行う活動を支援するよう努めるものとする。

(家庭生活と職業生活その他の社会における活動の両立支援)

第21条 市は、男女が共に家庭生活と職業生活その他の社会における活動を両立することができるようその支援に努めるものとする。

(事業者からの報告)

第22条 市長は、必要があると認めるときは、事業者に対し、男女共同参画に関する事項について報告を求めるとともに、助言することができる。

2 市長は、前項の報告により把握した状況について公表することができる。

(苦情及び相談への対応)

第23条 市は、市民又は事業者からの、男女共同参画の推進に影響を及ぼすと認められる市の施策に関する苦情及び性別により差別した取扱い等に関する相談に対し、関係機関と連携を図り、適切に対応するよう努めるものとする。

第3章 静岡市男女共同参画審議会

(設置)

第24条 男女共同参画を円滑に推進するため、静岡市男女共同参画審議会(以下「審議会」という。)を置く。

(所掌事務)

第25条 審議会は、第16条第3項の規定による諮問に対し答申を行うほか、男女共同参画の推進に関する必要な事項について調査審議する。

(組織)

第26条 審議会は、委員15人以内をもって組織し、男女いずれか一方の委員の数は、委員の総数の10分の4未満であってはならない。

(委員)

第27条 委員は、次に掲げる者のうちから市長が委嘱する。

- (1) 学識経験がある者
- (2) 関係団体が推薦する者
- (3) 市民
- (4) 前3号に掲げる者のほか、市長が適当と認める者

2 市長は、前項第3号に掲げる委員の選任に当たっては、公募の方法によるよう努めるものとする。

3 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 委員は、再任されることができる。

(会長及び副会長)

第28条 審議会に会長及び副会長を置く。

2 会長及び副会長は、委員の互選によりこれを定める。

3 会長は、審議会の会務を総理し、審議会を代表する。

4 会長は、審議会の会議の議長となる。

5 会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、副会長がその職務を代理する。

(会議)

第29条 審議会の会議は、会長が招集する。

2 審議会は、委員の半数以上が出席しなければ、会議を開くことができない。

3 審議会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

4 審議会は、必要があると認めるときは、関係者の出席を求めて説明又は意見を聴くことができる。

(庶務)

第30条 審議会の庶務は、生活文化局において処理する。

(平16条例98・平19条例90・一部改正)

(委任)

第31条 この章に規定するもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、会長が審議会に諮って定める。

第4章 雑則

(委任)

第32条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

附 則

この条例は、平成15年4月1日から施行する。

附 則(平成16年12月22日条例第98号)

この条例は、平成17年4月1日から施行する。

附 則(平成19年12月12日条例第90号)抄

(施行期日)

1 この条例は、平成20年4月1日から施行する。

配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律

(平成十三年法律第三十一号)

最終改正：平成二十五年法律第七十二号

目次

前文

第一章 総則（第一条・第二条）

第一章の二 基本方針及び都道府県基本計画等（第二条の二・第二条の三）

第二章 配偶者暴力相談支援センター等（第三条―第五条）

第三章 被害者の保護（第六条―第九条の二）

第四章 保護命令（第十条―第二十二條）

第五章 雑則（第二十三条―第二十八条）

第五章の二 補則（第二十八条の二）

第六章 罰則（第二十九条・第三十条）

附則

我が国においては、日本国憲法に個人の尊重と法の下での平等がうたわれ、人権の擁護と男女平等の実現に向けた取組が行われている。

ところが、配偶者からの暴力は、犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害であるにもかかわらず、被害者の救済が必ずしも十分に行われてこなかった。また、配偶者からの暴力の被害者は、多くの場合女性であり、経済的自立が困難である女性に対して配偶者が暴力を加えることは、個人の尊厳を害し、男女平等の実現の妨げとなっている。

このような状況を改善し、人権の擁護と男女平等の実現を図るためには、配偶者からの暴力を防止し、被害者を保護するための施策を講ずることが必要である。このことは、女性に対する暴力を根絶しようと努めている国際社会における取組にも沿うものである。

ここに、配偶者からの暴力に係る通報、相談、保護、自立支援等の体制を整備することにより、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護を図るため、この法律を制定する。

第一章 総則

（定義）

第一条 この法律において「配偶者からの暴力」とは、配偶者からの身体に対する暴力（身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすものをいう。以下同じ。）又はこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動（以下この項及び第二十八条の二において「身体に対する暴力等」と総称する。）をいい、配偶者からの身体に対する暴力等を受けた後に、その者が離婚をし、又はその婚姻が取り消された場合にあつては、当該配偶者であつた者から引き続き受ける身体に対する暴力等を含むものとする。

2 この法律において「被害者」とは、配偶者からの暴力を受けた者をいう。

3 この法律にいう「配偶者」には、婚姻の届出をしていないが事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含み、「離婚」には、婚姻の届出をしていないが事実上婚姻関係と同様の事情にあつた者が、

事実上離婚したと同様の事情に入ることを含むものとする。

(国及び地方公共団体の責務)

第二条 国及び地方公共団体は、配偶者からの暴力を防止するとともに、被害者の自立を支援することを含め、その適切な保護を図る責務を有する。

第一章の二 基本方針及び都道府県基本計画等

(基本方針)

第二条の二 内閣総理大臣、国家公安委員会、法務大臣及び厚生労働大臣(以下この条及び次条第五項において「主務大臣」という。)は、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策に関する基本的な方針(以下この条並びに次条第一項及び第三項において「基本方針」という。)を定めなければならない。

2 基本方針においては、次に掲げる事項につき、次条第一項の都道府県基本計画及び同条第三項の市町村基本計画の指針となるべきものを定めるものとする。

一 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する基本的な事項

二 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の内容に関する事項

三 その他配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の実施に関する重要事項

3 主務大臣は、基本方針を定め、又はこれを変更しようとするときは、あらかじめ、関係行政機関の長に協議しなければならない。

4 主務大臣は、基本方針を定め、又はこれを変更したときは、遅滞なく、これを公表しなければならない。

(都道府県基本計画等)

第二条の三 都道府県は、基本方針に即して、当該都道府県における配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の実施に関する基本的な計画(以下この条において「都道府県基本計画」という。)を定めなければならない。

2 都道府県基本計画においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する基本的な方針

二 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の実施内容に関する事項

三 その他配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の実施に関する重要事項

3 市町村(特別区を含む。以下同じ。)は、基本方針に即し、かつ、都道府県基本計画を勘案して、当該市町村における配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の実施に関する基本的な計画(以下この条において「市町村基本計画」という。)を定めるよう努めなければならない。

4 都道府県又は市町村は、都道府県基本計画又は市町村基本計画を定め、又は変更したときは、遅滞なく、これを公表しなければならない。

5 主務大臣は、都道府県又は市町村に対し、都道府県基本計画又は市町村基本計画の作成のために必要な助言その他の援助を行うよう努めなければならない。

第二章 配偶者暴力相談支援センター等

(配偶者暴力相談支援センター)

第三条 都道府県は、当該都道府県が設置する婦人相談所その他の適切な施設において、当該各施設が配偶者暴力相談支援センターとしての機能を果たすようにするものとする。

2 市町村は、当該市町村が設置する適切な施設において、当該各施設が配偶者暴力相談支援センタ

一としての機能を果たすようにするよう努めるものとする。

3 配偶者暴力相談支援センターは、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のため、次に掲げる業務を行うものとする。

一 被害者に関する各般の問題について、相談に応ずること又は婦人相談員若しくは相談を行う機関を紹介すること。

二 被害者の心身の健康を回復させるため、医学的又は心理学的な指導その他の必要な指導を行うこと。

三 被害者(被害者がその家族を同伴する場合にあっては、被害者及びその同伴する家族。次号、第六号、第五条及び第八条の三において同じ。)の緊急時における安全の確保及び一時保護を行うこと。

四 被害者が自立して生活することを促進するため、就業の促進、住宅の確保、援護等に関する制度の利用等について、情報の提供、助言、関係機関との連絡調整その他の援助を行うこと。

五 第四章に定める保護命令の制度の利用について、情報の提供、助言、関係機関への連絡その他の援助を行うこと。

六 被害者を居住させ保護する施設の利用について、情報の提供、助言、関係機関との連絡調整その他の援助を行うこと。

4 前項第三号の一時保護は、婦人相談所が、自ら行い、又は厚生労働大臣が定める基準を満たす者に委託して行うものとする。

5 配偶者暴力相談支援センターは、その業務を行うに当たっては、必要に応じ、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護を図るための活動を行う民間の団体との連携に努めるものとする。

(婦人相談員による相談等)

第四条 婦人相談員は、被害者の相談に応じ、必要な指導を行うことができる。

(婦人保護施設における保護)

第五条 都道府県は、婦人保護施設において被害者の保護を行うことができる。

第三章 被害者の保護

(配偶者からの暴力の発見者による通報等)

第六条 配偶者からの暴力(配偶者又は配偶者であった者からの身体に対する暴力に限る。以下この章において同じ。)を受けている者を発見した者は、その旨を配偶者暴力相談支援センター又は警察官に通報するよう努めなければならない。

2 医師その他の医療関係者は、その業務を行うに当たり、配偶者からの暴力によって負傷し又は疾病にかかったと認められる者を発見したときは、その旨を配偶者暴力相談支援センター又は警察官に通報することができる。この場合において、その者の意思を尊重するよう努めるものとする。

3 刑法(明治四十年法律第四十五号)の秘密漏示罪の規定その他の守秘義務に関する法律の規定は、前二項の規定により通報することを妨げるものと解釈してはならない。

4 医師その他の医療関係者は、その業務を行うに当たり、配偶者からの暴力によって負傷し又は疾病にかかったと認められる者を発見したときは、その者に対し、配偶者暴力相談支援センター等の利用について、その有する情報を提供するよう努めなければならない。

(配偶者暴力相談支援センターによる保護についての説明等)

第七条 配偶者暴力相談支援センターは、被害者に関する通報又は相談を受けた場合には、必要に応

じ、被害者に対し、第三条第三項の規定により配偶者暴力相談支援センターが行う業務の内容について説明及び助言を行うとともに、必要な保護を受けることを勧奨するものとする。

(警察官による被害の防止)

第八条 警察官は、通報等により配偶者からの暴力が行われていると認めるときは、警察法(昭和二十九年法律第百六十二号)、警察官職務執行法(昭和二十三年法律第百三十六号)その他の法令の定めるところにより、暴力の制止、被害者の保護その他の配偶者からの暴力による被害の発生を防止するために必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

(警察本部長等の援助)

第八条の二 警視總監若しくは道府県警察本部長(道警察本部の所在地を包括する方面を除く方面については、方面本部長。第十五条第三項において同じ。)又は警察署長は、配偶者からの暴力を受けている者から、配偶者からの暴力による被害を自ら防止するための援助を受けたい旨の申出があり、その申出を相当と認めるときは、当該配偶者からの暴力を受けている者に対し、国家公安委員会規則で定めるところにより、当該被害を自ら防止するための措置の教示その他配偶者からの暴力による被害の発生を防止するために必要な援助を行うものとする。

(福祉事務所による自立支援)

第八条の三 社会福祉法(昭和二十六年法律第四十五号)に定める福祉に関する事務所(次条において「福祉事務所」という。)は、生活保護法(昭和二十五年法律第百四十四号)、児童福祉法(昭和二十二年法律第百六十四号)、母子及び寡婦福祉法(昭和三十一年法律第百二十九号)その他の法令の定めるところにより、被害者の自立を支援するために必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

(被害者の保護のための関係機関の連携協力)

第九条 配偶者暴力相談支援センター、都道府県警察、福祉事務所等都道府県又は市町村の関係機関その他の関係機関は、被害者の保護を行うに当たっては、その適切な保護が行われるよう、相互に連携を図りながら協力するよう努めるものとする。

(苦情の適切かつ迅速な処理)

第九条の二 前条の関係機関は、被害者の保護に係る職員の職務の執行に関して被害者から苦情の申出を受けたときは、適切かつ迅速にこれを処理するよう努めるものとする。

第四章 保護命令

(保護命令)

第十条 被害者(配偶者からの身体に対する暴力又は生命等に対する脅迫(被害者の生命又は身体に対し害を加える旨を告知してする脅迫をいう。以下この章において同じ。))を受けた者に限る。以下この章において同じ。)が、配偶者からの身体に対する暴力を受けた者である場合にあっては配偶者からの更なる身体に対する暴力(配偶者からの身体に対する暴力を受けた後に、被害者が離婚をし、又はその婚姻が取り消された場合にあっては、当該配偶者であった者から引き続き受ける身体に対する暴力。第十二条第一項第二号において同じ。)により、配偶者からの生命等に対する脅迫を受けた者である場合にあっては配偶者から受ける身体に対する暴力(配偶者からの生命等に対する脅迫を受けた後に、被害者が離婚をし、又はその婚姻が取り消された場合にあっては、当該配偶者であった者から引き続き受ける身体に対する暴力。同号において同じ。)により、その生命又は身体に重大な危害を受けるおそれ大きいときは、裁判所は、被害者の申立てにより、その生命又は身体に危害が加えられることを防止するため、当該配偶者(配偶者からの身体に対する暴力又

は生命等に対する脅迫を受けた後に、被害者が離婚をし、又はその婚姻が取り消された場合にあっては、当該配偶者であった者。以下この条、同項第三号及び第四号並びに第十八条第一項において同じ。)に対し、次の各号に掲げる事項を命ずるものとする。ただし、第二号に掲げる事項については、申立ての時において被害者及び当該配偶者が生活の本拠を共にする場合に限る。

一 命令の効力が生じた日から起算して六月間、被害者の住居(当該配偶者と共に生活の本拠としている住居を除く。以下この号において同じ。)その他の場所において被害者の身辺につきまとい、又は被害者の住居、勤務先その他その通常所在する場所の付近をはいかいしてはならないこと。

二 命令の効力が生じた日から起算して二月間、被害者と共に生活の本拠としている住居から退去すること及び当該住居の付近をはいかいしてはならないこと。

2 前項本文に規定する場合において、同項第一号の規定による命令を発する裁判所又は発した裁判所は、被害者の申立てにより、その生命又は身体に危害が加えられることを防止するため、当該配偶者に対し、命令の効力が生じた日以後、同号の規定による命令の効力が生じた日から起算して六月を経過する日までの間、被害者に対して次の各号に掲げるいずれの行為もしてはならないことを命ずるものとする。

一 面会を要求すること。

二 その行動を監視していると思わせるような事項を告げ、又はその知り得る状態に置くこと。

三 著しく粗野又は乱暴な言動をすること。

四 電話をかけて何も告げず、又は緊急やむを得ない場合を除き、連続して、電話をかけ、ファクシミリ装置を用いて送信し、若しくは電子メールを送信すること。

五 緊急やむを得ない場合を除き、午後十時から午前六時までの間に、電話をかけ、ファクシミリ装置を用いて送信し、又は電子メールを送信すること。

六 汚物、動物の死体その他の著しく不快又は嫌悪の情を催させるような物を送付し、又はその知り得る状態に置くこと。

七 その名誉を害する事項を告げ、又はその知り得る状態に置くこと。

八 その性的羞しゆう恥心を害する事項を告げ、若しくはその知り得る状態に置き、又はその性的羞恥心を害する文書、図画その他の物を送付し、若しくはその知り得る状態に置くこと。

3 第一項本文に規定する場合において、被害者がその成年に達しない子(以下この項及び次項並びに第十二条第一項第三号において単に「子」という。)と同居しているときであって、配偶者が幼年の子を連れ戻すと疑うに足る言動を行っていることその他の事情があることから被害者がその同居している子に関して配偶者と面会することを余儀なくされることを防止するため必要があると認めるときは、第一項第一号の規定による命令を発する裁判所又は発した裁判所は、被害者の申立てにより、その生命又は身体に危害が加えられることを防止するため、当該配偶者に対し、命令の効力が生じた日以後、同号の規定による命令の効力が生じた日から起算して六月を経過する日までの間、当該子の住居(当該配偶者と共に生活の本拠としている住居を除く。以下この項において同じ。)、就学する学校その他の場所において当該子の身辺につきまとい、又は当該子の住居、就学する学校その他その通常所在する場所の付近をはいかいしてはならないことを命ずるものとする。ただし、当該子が十五歳以上であるときは、その同意がある場合に限る。

4 第一項本文に規定する場合において、配偶者が被害者の親族その他被害者と社会生活において密接な関係を有する者(被害者と同居している子及び配偶者と同居している者を除く。以下この項及

び次項並びに第十二条第一項第四号において「親族等」という。)の住居に押し掛けて著しく粗野又は乱暴な言動を行っていることその他の事情があることから被害者がその親族等に関して配偶者と面会することを余儀なくされることを防止するため必要があると認めるときは、第一項第一号の規定による命令を発する裁判所又は発した裁判所は、被害者の申立てにより、その生命又は身体に危害が加えられることを防止するため、当該配偶者に対し、命令の効力が生じた日以後、同号の規定による命令の効力が生じた日から起算して六月を経過する日までの間、当該親族等の住居(当該配偶者と共に生活の本拠としている住居を除く。以下この項において同じ。)その他の場所において当該親族等の身边につきまとい、又は当該親族等の住居、勤務先その他その通常所在する場所の付近をはいかいしてはならないことを命ずるものとする。

- 5 前項の申立ては、当該親族等(被害者の十五歳未満の子を除く。以下この項において同じ。)の同意(当該親族等が十五歳未満の者又は成年被後見人である場合にあっては、その法定代理人の同意)がある場合に限り、することができる。

(管轄裁判所)

第十一条 前条第一項の規定による命令の申立てに係る事件は、相手方の住所(日本国内に住所がないとき又は住所が知れないときは居所)の所在地を管轄する地方裁判所の管轄に属する。

- 2 前条第一項の規定による命令の申立ては、次の各号に掲げる地を管轄する地方裁判所にもすることができる。

一 申立人の住所又は居所の所在地

二 当該申立てに係る配偶者からの身体に対する暴力又は生命等に対する脅迫が行われた地

(保護命令の申立て)

第十二条 第十条第一項から第四項までの規定による命令(以下「保護命令」という。)の申立ては、次に掲げる事項を記載した書面でしなければならない。

一 配偶者からの身体に対する暴力又は生命等に対する脅迫を受けた状況

二 配偶者からの更なる身体に対する暴力又は配偶者からの生命等に対する脅迫を受けた後の配偶者から受ける身体に対する暴力により、生命又は身体に重大な危害を受けるおそれ大きいと認めるに足りる申立ての時ににおける事情

三 第十条第三項の規定による命令の申立てをする場合にあっては、被害者が当該同居している子に関して配偶者と面会することを余儀なくされることを防止するため当該命令を発する必要があると認めるに足りる申立ての時ににおける事情

四 第十条第四項の規定による命令の申立てをする場合にあっては、被害者が当該親族等に関して配偶者と面会することを余儀なくされることを防止するため当該命令を発する必要があると認めるに足りる申立ての時ににおける事情

五 配偶者暴力相談支援センターの職員又は警察職員に対し、前各号に掲げる事項について相談し、又は援助若しくは保護を求めた事実の有無及びその事実があるときは、次に掲げる事項

イ 当該配偶者暴力相談支援センター又は当該警察職員の所属官署の名称

ロ 相談し、又は援助若しくは保護を求めた日時及び場所

ハ 相談又は求めた援助若しくは保護の内容

ニ 相談又は申立人の求めに対して執られた措置の内容

- 2 前項の書面(以下「申立書」という。)に同項第五号イからニまでに掲げる事項の記載がない場合には、申立書には、同項第一号から第四号までに掲げる事項についての申立人の供述を記載した書

面で公証人法(明治四十一年法律第五十三号)第五十八条ノ二第一項の認証を受けたものを添付しなければならない。

(迅速な裁判)

第十三条 裁判所は、保護命令の申立てに係る事件については、速やかに裁判をするものとする。

(保護命令事件の審理の方法)

第十四条 保護命令は、口頭弁論又は相手方が立ち会うことができる審尋の期日を経なければ、これを発することができない。ただし、その期日を経ることにより保護命令の申立ての目的を達することができない事情があるときは、この限りでない。

2 申立書に第十二条第一項第五号イからニまでに掲げる事項の記載がある場合には、裁判所は、当該配偶者暴力相談支援センター又は当該所属官署の長に対し、申立人が相談し又は援助若しくは保護を求めた際の状況及びこれに対して執られた措置の内容を記載した書面の提出を求めるものとする。この場合において、当該配偶者暴力相談支援センター又は当該所属官署の長は、これに速やかに応ずるものとする。

3 裁判所は、必要があると認める場合には、前項の配偶者暴力相談支援センター若しくは所属官署の長又は申立人から相談を受け、若しくは援助若しくは保護を求められた職員に対し、同項の規定により書面の提出を求めた事項に関して更に説明を求めることができる。

(保護命令の申立てについての決定等)

第十五条 保護命令の申立てについての決定には、理由を付さなければならない。ただし、口頭弁論を経ないで決定をする場合には、理由の要旨を示せば足りる。

2 保護命令は、相手方に対する決定書の送達又は相手方が出頭した口頭弁論若しくは審尋の期日における言渡しによって、その効力を生ずる。

3 保護命令を発したときは、裁判所書記官は、速やかにその旨及びその内容を申立人の住所又は居所を管轄する警視総監又は道府県警察本部長に通知するものとする。

4 保護命令を発した場合において、申立人が配偶者暴力相談支援センターの職員に対し相談し、又は援助若しくは保護を求めた事実があり、かつ、申立書に当該事実に係る第十二条第一項第五号イからニまでに掲げる事項の記載があるときは、裁判所書記官は、速やかに、保護命令を発した旨及びその内容を、当該申立書に名称が記載された配偶者暴力相談支援センター(当該申立書に名称が記載された配偶者暴力相談支援センターが二以上ある場合にあっては、申立人がその職員に対し相談し、又は援助若しくは保護を求めた日時が最も遅い配偶者暴力相談支援センター)の長に通知するものとする。

5 保護命令は、執行力を有しない。

(即時抗告)

第十六条 保護命令の申立てについての裁判に対しては、即時抗告をすることができる。

2 前項の即時抗告は、保護命令の効力に影響を及ぼさない。

3 即時抗告があった場合において、保護命令の取消しの原因となることが明らかな事情があることにつき疎明があったときに限り、抗告裁判所は、申立てにより、即時抗告についての裁判が効力を生ずるまでの間、保護命令の効力の停止を命ずることができる。事件の記録が原裁判所に存する間は、原裁判所も、この処分を命ずることができる。

4 前項の規定により第十条第一項第一号の規定による命令の効力の停止を命ずる場合において、同条第二項から第四項までの規定による命令が発せられているときは、裁判所は、当該命令の効力の

停止をも命じなければならない。

- 5 前二項の規定による裁判に対しては、不服を申し立てることができない。
- 6 抗告裁判所が第十条第一項第一号の規定による命令を取り消す場合において、同条第二項から第四項までの規定による命令が発せられているときは、抗告裁判所は、当該命令をも取り消さなければならない。
- 7 前条第四項の規定による通知がされている保護命令について、第三項若しくは第四項の規定によりその効力の停止を命じたとき又は抗告裁判所がこれを取り消したときは、裁判所書記官は、速やかに、その旨及びその内容を当該通知をした配偶者暴力相談支援センターの長に通知するものとする。
- 8 前条第三項の規定は、第三項及び第四項の場合並びに抗告裁判所が保護命令を取り消した場合について準用する。

(保護命令の取消し)

第十七条 保護命令を発した裁判所は、当該保護命令の申立てをした者の申立てがあつた場合には、当該保護命令を取り消さなければならない。第十条第一項第一号又は第二項から第四項までの規定による命令にあつては同号の規定による命令が効力を生じた日から起算して三月を経過した後において、同条第一項第二号の規定による命令にあつては当該命令が効力を生じた日から起算して二週間を経過した後において、これらの命令を受けた者が申し立て、当該裁判所がこれらの命令の申立てをした者に異議がないことを確認したときも、同様とする。

- 2 前条第六項の規定は、第十条第一項第一号の規定による命令を発した裁判所が前項の規定により当該命令を取り消す場合について準用する。
- 3 第十五条第三項及び前条第七項の規定は、前二項の場合について準用する。

(第十条第一項第二号の規定による命令の再度の申立て)

第十八条 第十条第一項第二号の規定による命令が発せられた後に当該発せられた命令の申立ての理由となつた身体に対する暴力又は生命等に対する脅迫と同一の事実を理由とする同号の規定による命令の再度の申立てがあつたときは、裁判所は、配偶者と共に生活の本拠としている住居から転居しようとする被害者がその責めに帰することのできない事由により当該発せられた命令の効力が生ずる日から起算して二月を経過する日までに当該住居からの転居を完了することができないことその他の同号の規定による命令を再度発する必要があると認めるべき事情があるときに限り、当該命令を発するものとする。ただし、当該命令を発することにより当該配偶者の生活に特に著しい支障を生ずると認めるときは、当該命令を発しないことができる。

- 2 前項の申立てをする場合における第十二条の規定の適用については、同条第一項各号列記以外の部分中「次に掲げる事項」とあるのは「第一号、第二号及び第五号に掲げる事項並びに第十八条第一項本文の事情」と、同項第五号中「前各号に掲げる事項」とあるのは「第一号及び第二号に掲げる事項並びに第十八条第一項本文の事情」と、同条第二項中「同項第一号から第四号までに掲げる事項」とあるのは「同項第一号及び第二号に掲げる事項並びに第十八条第一項本文の事情」とする。

(事件の記録の閲覧等)

第十九条 保護命令に関する手続について、当事者は、裁判所書記官に対し、事件の記録の閲覧若しくは謄写、その正本、謄本若しくは抄本の交付又は事件に関する事項の証明書の交付を請求することができる。ただし、相手方にあつては、保護命令の申立てに関し口頭弁論若しくは相手方を呼び出す審尋の期日の指定があり、又は相手方に対する保護命令の送達があるまでの間は、この限りで

ない。

(法務事務官による宣誓認証)

第二十条 法務局若しくは地方法務局又はその支局の管轄区域内に公証人がいない場合又は公証人がその職務を行うことができない場合には、法務大臣は、当該法務局若しくは地方法務局又はその支局に勤務する法務事務官に第十二条第二項(第十八条第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。)の認証を行わせることができる。

(民事訴訟法の準用)

第二十一条 この法律に特別の定めがある場合を除き、保護命令に関する手続に関しては、その性質に反しない限り、民事訴訟法(平成八年法律第百九号)の規定を準用する。

(最高裁判所規則)

第二十二条 この法律に定めるもののほか、保護命令に関する手続に関し必要な事項は、最高裁判所規則で定める。

第五章 雑則

(職務関係者による配慮等)

第二十三条 配偶者からの暴力に係る被害者の保護、捜査、裁判等に職務上関係のある者(次項において「職務関係者」という。)は、その職務を行うに当たり、被害者の心身の状況、その置かれている環境等を踏まえ、被害者の国籍、障害の有無等を問わずその人権を尊重するとともに、その安全の確保及び秘密の保持に十分な配慮をしなければならない。

2 国及び地方公共団体は、職務関係者に対し、被害者の人権、配偶者からの暴力の特性等に関する理解を深めるために必要な研修及び啓発を行うものとする。

(教育及び啓発)

第二十四条 国及び地方公共団体は、配偶者からの暴力の防止に関する国民の理解を深めるための教育及び啓発に努めるものとする。

(調査研究の推進等)

第二十五条 国及び地方公共団体は、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に資するため、加害者の更生のための指導の方法、被害者の心身の健康を回復させるための方法等に関する調査研究の推進並びに被害者の保護に係る人材の養成及び資質の向上に努めるものとする。

(民間の団体に対する援助)

第二十六条 国及び地方公共団体は、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護を図るための活動を行う民間の団体に対し、必要な援助を行うよう努めるものとする。

(都道府県及び市の支弁)

第二十七条 都道府県は、次の各号に掲げる費用を支弁しなければならない。

- 一 第三条第三項の規定に基づき同項に掲げる業務を行う婦人相談所の運営に要する費用(次号に掲げる費用を除く。)
- 二 第三条第三項第三号の規定に基づき婦人相談所が行う一時保護(同条第四項に規定する厚生労働大臣が定める基準を満たす者に委託して行う場合を含む。)に要する費用
- 三 第四条の規定に基づき都道府県知事の委嘱する婦人相談員が行う業務に要する費用
- 四 第五条の規定に基づき都道府県が行う保護(市町村、社会福祉法人その他相当と認める者に委託して行う場合を含む。)及びこれに伴い必要な事務に要する費用

2 市は、第四条の規定に基づきその長の委嘱する婦人相談員が行う業務に要する費用を支弁しなければならない。

(国の負担及び補助)

第二十八条 国は、政令の定めるところにより、都道府県が前条第一項の規定により支弁した費用のうち、同項第一号及び第二号に掲げるものについては、その十分の五を負担するものとする。

2 国は、予算の範囲内において、次の各号に掲げる費用の十分の五以内を補助することができる。

一 都道府県が前条第一項の規定により支弁した費用のうち、同項第三号及び第四号に掲げるもの

二 市が前条第二項の規定により支弁した費用

第五章の二 補則

(この法律の準用)

第二十八条の二 第二条及び第一章の二から前章までの規定は、生活の本拠を共にする交際（婚姻関係における共同生活に類する共同生活を営んでいないものを除く。）をする関係にある相手からの暴力（当該関係にある相手からの身体に対する暴力等をいい、当該関係にある相手からの身体に対する暴力等を受けた後に、その者が当該関係を解消した場合にあっては、当該関係にあった者から引き続き受ける身体に対する暴力等を含む。）及び当該暴力を受けた者について準用する。この場合において、これらの規定中「配偶者からの暴力」とあるのは「第二十八条の二に規定する関係にある相手からの暴力」と読み替えるほか、次の表の上欄に掲げる規定中同表の中欄に掲げる字句は、それぞれ同表の下欄に掲げる字句に読み替えるものとする。

第二条	被害者	被害者(第二十八条の二に規定する関係にある相手からの暴力を受けた者をいう。以下同じ。)
第六条第一項	配偶者又は配偶者であった者	同条に規定する関係にある相手又は同条に規定する関係にある相手であった者
第十条第一項から第四項まで、第十一条第二項第二号、第十二条第一項第一号から第四号まで及び第十八条第一項	配偶者	第二十八条の二に規定する関係にある相手
第十条第一項	離婚をし、又はその婚姻が取り消された場合	第二十八条の二に規定する関係を解消した場合

第六章 罰則

第二十九条 保護命令（前条において読み替えて準用する第十条第一項から第四項までの規定によるものを含む。次条において同じ。）に違反した者は、一年以下の懲役又は百万円以下の罰金に処す

る。

第三十条 第十二条第一項(第十八条第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。)又は第二十八条の二において読み替えて準用する第十二条第一項(第二十八条の二において準用する第十八条第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。)の規定により記載すべき事項について虚偽の記載のある申立書により保護命令の申立てをした者は、十万円以下の過料に処する。

附 則 [抄]

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。ただし、第二章、第六条(配偶者暴力相談支援センターに係る部分に限る。)、第七条、第九条(配偶者暴力相談支援センターに係る部分に限る。)、第二十七条及び第二十八条の規定は、平成十四年四月一日から施行する。

(経過措置)

第二条 平成十四年三月三十一日までに婦人相談所に対し被害者が配偶者からの身体に対する暴力に関して相談し、又は援助若しくは保護を求めた場合における当該被害者からの保護命令の申立てに係る事件に関する第十二条第一項第四号並びに第十四条第二項及び第三項の規定の適用については、これらの規定中「配偶者暴力相談支援センター」とあるのは、「婦人相談所」とする。

(検討)

第三条 この法律の規定については、この法律の施行後三年を目途として、この法律の施行状況等を勘案し、検討が加えられ、その結果に基づいて必要な措置が講ぜられるものとする。

附 則 [平成十六年法律第六十四号]

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

(経過措置)

第二条 この法律の施行前にしたこの法律による改正前の配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律(次項において「旧法」という。)第十条の規定による命令の申立てに係る同条の規定による命令に関する事件については、なお従前の例による。

2 旧法第十条第二号の規定による命令が発せられた後に当該命令の申立ての理由となった身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすものと同一の事実を理由とするこの法律による改正後の配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律(以下「新法」という。)第十条第一項第二号の規定による命令の申立て(この法律の施行後最初にされるものに限る。)があった場合における新法第十八条第一項の規定の適用については、同項中「二月」とあるのは、「二週間」とする。

(検討)

第三条 新法の規定については、この法律の施行後三年を目途として、新法の施行状況等を勘案し、検討が加えられ、その結果に基づいて必要な措置が講ぜられるものとする。

附 則 [平成十九年法律第百十三号] [抄]

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

(経過措置)

第二条 この法律の施行前にしたこの法律による改正前の配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律第十条の規定による命令の申立てに係る同条の規定による命令に関する事件については、なお従前の例による。

附 則 〔平成二十五年法律第七十二号〕〔抄〕

(施行期日)

- 1 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等のための施策に関する基本的な方針（概要）

平成25年12月26日
内閣府、国家公安委員会、
法務省、厚生労働省告示第1号

第1 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する基本的な事項

1 基本的な考え方

配偶者からの暴力は、犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害である。

2 我が国の現状

平成13年4月、法が制定され、基本方針の策定等を内容とする平成16年5月、平成19年7月の法改正を経て、平成25年6月に生活の本拠を共にする交際相手からの暴力及び被害者についても配偶者からの暴力及び被害者に準じて法の適用対象とする法改正が行われ、平成26年1月3日に施行された。

3 基本方針並びに都道府県基本計画及び市町村基本計画

(1) 基本方針

基本方針は、都道府県基本計画及び市町村基本計画の指針となるべきものである。基本方針の内容についても、法と同様、生活の本拠を共にする交際相手からの暴力及び被害者について準用することとする。

(2) 都道府県基本計画及び市町村基本計画

基本計画は、第一線で中心となって施策に取り組む地方公共団体が策定するものである。策定に当たっては、それぞれの都道府県又は市町村の状況を踏まえた計画とするとともに、都道府県と市町村の役割分担についても、基本方針を基に、地域の実情に合った適切な役割分担となるよう、あらかじめ協議することが必要である。被害者の立場に立った切れ目のない支援のため、都道府県については、被害者の支援における中核として、一時保護等の実施、市町村への支援、職務関係者の研修等広域的な施策等、市町村については、身近な行政主体の窓口として、相談窓口の設置、緊急時における安全の確保、地域における継続的な自立支援等が基本的な役割として考えられる。

第2 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の内容に関する事項

1 配偶者暴力相談支援センター

都道府県の支援センターは、都道府県における対策の中核として、処遇の難しい事案への対応や専門的・広域的な対応が求められる業務にも注力することが望ましい。市町村の支援センターは、身近な行政主体における支援の窓口として、その性格に即した基本的な役割について、積極的に取り組むことが望ましい。また、民間団体と支援センターとが必要に応じ、機動的に連携を図りながら対応することが必要である。

2 婦人相談員

婦人相談員は、被害者に関する各般の相談に応じるとともに、その態様に応じた適切な援助を行

うことが必要である。

3 配偶者からの暴力の発見者による通報等

(1) 通報

都道府県及び市町村は、被害者を発見した者は、その旨を支援センター又は警察官に通報するよう努めることの周知を図ることが必要である。医師その他の医療関係者等は、被害者を発見した場合には、守秘義務を理由にためらうことなく、支援センター又は警察官に対して通報を行うことが必要である。

(2) 通報等への対応

支援センターにおいて、国民から通報を受けた場合は、通報者に対し、被害者に支援センターの利用に関する情報を教示してもらうよう協力を求めることが必要である。医療関係者から通報を受けた場合は、被害者の意思を踏まえ、当該医療機関に出向く等により状況を把握し、被害者に対して説明や助言を行うことが望ましい。警察において、配偶者からの暴力が行われていると認めた場合は、暴力の制止に当たるとともに、応急の救護を要すると認められる被害者を保護することが必要である。

4 被害者からの相談等

(1) 配偶者暴力相談支援センター

電話による相談があった場合は、その訴えに耳を傾け、適切な助言を行うこと、また、面接相談を行う場合は、その話を十分に聴いた上で、どのような援助を求めているのかを把握し、問題解決に向けて助言を行うことが必要である。

(2) 警察

被害者からの相談において意思決定を支援するなど、被害者の立場に立った適切な対応を行うとともに、相談に係る事案が刑罰法令に抵触すると認められる場合には、被害者の意思を踏まえ捜査を開始するほか、刑事事件として立件が困難であると認められる場合であっても、加害者に対する指導警告を行うなどの措置を講ずることが必要である。被害者から警察本部長等の援助を受けたい旨の申出があり、その申出を相当と認めるときは、国家公安委員会規則で定めるところにより、必要な援助を行うことが必要である。

(3) 人権擁護機関

支援センター、警察等と連携を図りながら、被害者に必要な助言、婦人相談所等一時保護施設への紹介等の援助をし、暴力行為に及んだ者等に対しては、これをやめるよう、説示、啓発を行うことが必要である。

(4) 民間団体との連携

配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護を図るための活動を行う民間団体では、相談業務、同行支援、自立支援など大きな役割を担っている。

5 被害者に対する医学的又は心理学的な援助等

(1) 被害者に対する援助

婦人相談所において、医師、心理判定員等、支援にかかわる職員が連携して被害者に対する医学的又は心理学的な援助を行うことが必要である。また、被害者が、地域での生活を送りながら、身近な場所で相談等の援助を受けられるよう、支援センターは、カウンセリングを行うことや、専門家や民間団体等と連携し、適切な相談機関を紹介するなどの対応を採ることが必要である。

(2) 子どもに対する援助

児童相談所において、医学的又は心理学的な援助を必要とする子どもに対して、精神科医や児童心理司等が連携を図りながら、カウンセリング等を実施することが必要である。また、学校及び教育委員会並びに支援センターは、学校において、スクールカウンセラー等が相談に応じていること等について、適切に情報提供を行うことが必要である。

(3) 医療機関との連携

支援センターは、被害者本人及びその子どもを支援するに当たって、専門医学的な判断や治療を必要とする場合は、医療機関への紹介、あっせんを行うことが必要である。

6 被害者の緊急時における安全の確保及び一時保護等

(1) 緊急時における安全の確保

婦人相談所の一時保護所が離れている等の場合において、緊急に保護を求めてきた被害者を一時保護が行われるまでの間等に適当な場所にかくまう、又は避難場所を提供すること等の緊急時における安全の確保は、身近な行政主体である市町村において、地域における社会資源を活用して積極的に実施されることが望ましい。

(2) 一時保護

一時保護は、配偶者からの暴力を避けるため緊急に保護すること等を目的に行われるものであるから、夜間、休日を問わず、一時保護の要否判断を速やかに行う体制を整えることが必要である。また、それぞれの被害者の状況等を考慮し、被害者にとって最も適当と考えられる一時保護の方法及び施設を選定することが必要である。

(3) 婦人保護施設等

婦人保護施設は、適切な職員を配置し、心身の健康の回復や生活基盤の安定化と自立に向けた支援を行うことが必要である。母子生活支援施設は、適切な職員を配置し、子どもの保育や教育等を含め、母子について心身の健康の回復や生活基盤の安定化と自立に向けた支援を行うとともに、退所後についても相談その他の援助を行うことが必要である。

(4) 広域的な対応

都道府県域を越えて一時保護・施設入所がなされる広域的な対応も増加しており、これら地方公共団体間の広域的な連携を円滑に実施することが必要である。

7 被害者の自立の支援

(1) 関係機関等との連絡調整等

支援センターが中心となって関係機関の協議会等を設置し、関係機関等の相互の連携体制について協議を行うとともに、各機関の担当者が参加して、具体的な事案に即して協議を行う場も継続的に設けることが望ましい。また、手続の一元化や同行支援を行うことにより、被害者の負担の軽減と、手続の円滑化を図ることが望ましい。

(2) 被害者等に係る情報の保護

支援センターは、住民基本台帳の閲覧等に関し、被害者を保護する観点から、加害者からの請求については閲覧させない等の措置が執られていることについて、情報提供等を行うことが必要である。また、住民基本台帳からの情報に基づき事務の処理を行う関係部局においては、閲覧等の制限の対象となっている被害者について、特に厳重に情報の管理を行うことが必要である。

(3) 生活の支援

福祉事務所及び母子自立支援員においては、法令に基づき被害者の自立支援を行うことが必要である。福祉事務所においては、被害者が相談・申請を行う場所や、生活保護の申請を受けて、

扶養義務者に対して扶養の可能性を調査する際の方法や範囲等に関し、被害者の安全確保の観点から適切に配慮することが必要である。

(4) 就業の支援

公共職業安定所や職業訓練施設においては、被害者一人一人の状況に応じたきめ細かな就業支援に積極的に取り組むことが必要である。また、子どものいる被害者については、母子家庭等就業・自立支援センターにおける就業相談等の活用についても積極的に促すことが必要である。

(5) 住宅の確保

公営住宅の事業主体において、被害者の自立支援のため、公営住宅の優先入居や目的外使用等の制度が一層活用されることが必要である。また、都道府県等においては、身元保証人が得られないことでアパート等の賃借が困難となっている被害者のための身元保証人を確保するための事業の速やかな普及を図ることが望ましい。

(6) 医療保険

婦人相談所等が発行する証明書を持って保険者に申し出ることにより、健康保険における被扶養者又は国民健康保険組合における組合員の世帯に属する者から外れること、また、第三者行為による傷病についても、保険診療による受診が可能であること等の情報提供等を行うことが必要である。

(7) 年金

被害者が年金事務所において手続きをとることにより、国民年金原簿等に記載されている住所等が知られることのないよう、秘密の保持に配慮した取扱いが行われること等について、情報提供等を行うことが必要である。

(8) 子どもの就学・保育等

支援センターは、被害者等の安全の確保を図りつつ、子どもの教育を受ける権利が保障されるよう、教育委員会、学校と連絡をとるとともに、被害者に対し、必要な情報提供を行うことが必要である。国においては、市町村に対し、保育所への入所については、母子家庭等の子どもについて、保育所入所の必要性が高いものとして優先的に取り扱う特別の配慮を引き続き求めるよう努める。また、支援センターにおいては、住民票の記載がなされていない場合であっても、予防接種や健診が受けられることについて、情報提供等を行うことが必要である。

(9) その他配偶者暴力相談支援センターの取組

離婚調停手続等について各種の法律相談窓口を紹介するなど、被害者の自立を支援するために必要な措置を講ずることが望ましい。資力の乏しい被害者が無料法律相談等民事法律扶助制度を利用しやすくするため、日本司法支援センターに関する情報の提供を行うことが望ましい。また、住民票の記載がなされていない場合の介護給付等の扱いについて情報提供を行うことが必要である。

8 保護命令制度の利用等

(1) 保護命令制度の利用

被害者が保護命令の申立てを希望する場合には、申立先の裁判所や申立書等の記入方法等についての助言を行うとともに、保護命令の手続の中で、申立書や添付した証拠書類の写し等が裁判所から相手方に送付されること、緊急に保護命令を発令しなければ被害者の保護ができない場合において、暴力等の事実など保護命令の発令要件の証明が可能なときは、裁判所に対し、審尋等の期日を経ずに発令するようにその事情を申し出ることができること等について、被害者に対し

説明することが必要である。

(2) 保護命令の通知を受けた場合の対応

ア 警察

速やかに被害者と連絡を取り、被害者の意向を確認した上で被害者の住所又は居所を訪問するなどして、緊急時の迅速な通報等について教示することが必要である。また、加害者に対しても、保護命令の趣旨及び保護命令違反が罪に当たることを認識させ、保護命令が確実に遵守されるよう指導警告等を行うことが必要である。

イ 配偶者暴力相談支援センター

速やかに被害者と連絡を取り、安全の確保や、親族等への接近禁止命令が出された場合には、当該親族等へその旨連絡すること等、保護命令発令後の留意事項について情報提供を行うことが必要である。また、警察と連携を図って被害者の安全の確保に努めることが必要である。

9 関係機関の連携協力等

(1) 連携協力の方法

被害者の支援のためには、関係機関が共通認識を持ち、日々の相談、一時保護、自立支援等様々な段階において、緊密に連携しつつ取り組むことが必要である。

(2) 関係機関による協議会等

関係部局や機関の長により構成される代表者会議、被害者の支援に直接携わる者により構成される実務者会議、実際の個別の事案に対応する個別ケース検討会議等、重層的な構成にすることが望ましい。参加機関としては、都道府県又は市町村の関係機関はもとより、関係する行政機関、民間団体等について、地域の実情に応じ、参加を検討することが望ましい。

(3) 関連する地域ネットワークの活用

関連の深い分野における既存のネットワークとの連携や統合により、関連施策との連携協力を効果的かつ効率的に進めることについても、検討することが望ましい。

(4) 広域的な連携

市町村又は都道府県の枠を越えた関係機関の広域的な連携が必要になる場合も考えられることから、あらかじめ、近隣の地方公共団体と連携について検討しておくことが望ましい。

10 職務関係者による配慮・研修及び啓発

(1) 職務関係者による配慮

職務関係者は、配偶者からの暴力の特性等を十分理解した上で、被害者の立場に配慮して職務を行うことが必要である。特に被害者と直接接する場合は、被害者に更なる被害（二次的被害）が生じることのないよう配慮することが必要である。職務を行う際は、被害者等に係る情報の保護に十分配慮することが必要である。また、被害者には、外国人や障害者である者等も当然含まれていること等に十分留意しつつ、それらの被害者の立場に配慮して職務を行うことが必要である。

(2) 職務関係者に対する研修及び啓発

研修及び啓発の実施に当たっては、配偶者からの暴力の特性や被害者の立場を十分に理解した上での対応が徹底されるよう配慮することが必要である。特に、被害者と直接接する立場の者に対する研修及び啓発においては、二次的被害の防止の観点が重要である。

11 苦情の適切かつ迅速な処理

関係機関においては、申し出られた苦情について、誠実に受け止め、適切かつ迅速に処理し、必

要に応じ、職務の執行の改善に反映するとともに、可能な限り処理結果について申立人に対する説明責任を果たすことが望ましい。

12 教育啓発

(1) 啓発の実施方法と留意事項

啓発の実施に際しては、関係機関が連携協力して取り組むことが効果的だと考えられる。啓発を通じて、地域住民に対して、配偶者からの暴力に関する的確な理解と協力が得られるよう努めることが必要である。

(2) 若年層への教育啓発

配偶者からの暴力の防止に資するよう、学校・家庭・地域において、人権尊重の意識を高める教育啓発や男女平等の理念に基づく教育等を促進することが必要である。

13 調査研究の推進等

(1) 調査研究の推進

国においては、加害者の更生のための指導の方法に関する調査研究について、いかに被害者の安全を高めるか等をその目的とするよう留意して、配偶者からの暴力に関する加害者に対する指導等の実施に向けた調査研究の推進に努める。また、被害者の心身の健康を回復させるための方法等について、配偶者からの暴力の被害の実態把握や被害者の自立支援に寄与するため、調査研究の推進に努める。

(2) 人材の育成等

関係機関は、被害者の支援に係る人材の育成及び資質の向上について、職務関係者に対する研修等を通じ、十分配慮することが必要である。

14 民間の団体に対する援助等

配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護を図るためには、国、都道府県及び市町村と、民間団体等とが緊密に連携を図りながら、より効果的な施策の実施を図っていくことが必要である。どのような連携を行うかは、それぞれの地域の実情と民間団体等の実態等を踏まえ、それぞれの都道府県又は市町村において判断することが望ましい。

第3 その他配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護のための施策の実施に関する重要事項

1 基本方針に基づく施策の実施状況に係る評価

国及び地方公共団体における施策の実施状況等を把握するとともに、基本方針に基づく施策の実施状況に係る評価を適宜行い、必要があると認めるときは、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

2 基本計画の策定・見直しに係る指針

(1) 基本計画の策定

基本計画の策定に際しては、その地域における配偶者からの暴力をめぐる状況や施策の実施状況を把握することが必要である。策定に当たっては、基本方針に掲げた各項目の関係部局が連携して取り組むことが望ましい。また、被害者の支援に取り組む民間団体等広く関係者の意見を聴取することが望ましい。

(2) 基本計画の見直し等

基本計画については、基本方針の見直しに合わせて見直すことが必要である。なお、計画期間内であっても、新たに基本計画に盛り込むべき事項が生じるなどの場合は、必要に応じ、基本計画を見直すことが望ましい。

写

平成 25 年 10 月 7 日

静岡市長 田 辺 信 宏 様

静岡市男女共同参画審議会

会 長 大 村 知 子



静岡市における配偶者等からの暴力の防止及び被害者の
支援のための施策に関する基本的な計画について（答申）

平成 25 年 7 月 23 日付け、25 静生市参第 1453 号により静岡市長から諮問された静岡市における配偶者暴力対策の基本的な考え方について、本審議会で審議、検討した結果、次のとおり答申します。

記

1 諮問事項

配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律第 2 条の 3 第 3 項に基づく静岡市における配偶者暴力対策の基本的な考え方について

2 結 論

別添のとおり答申いたします。

静岡市男女共同参画審議会委員名簿

(敬称略・副会長以下五十音順)

(任期：H25年6月23日からH27年6月22日まで)

	条例第27条第1項の区分	氏 名 (就任年月)
	推薦団体名	所 属 等
1 会長	学識経験がある者	大 村 知 子 (H21.6～) 静岡大学名誉教授
2 副会長	学識経験がある者	秋 山 憲 治 (H21.6～) 静岡理工科大学総合情報学部人間情報デザイン学科 教授
3	学識経験がある者	太 田 尚 子 (H23.6～) 静岡県立大学看護学部看護学科 教授
4	関係団体が推薦する者 一般財団法人静岡経済研究所	岸 本 高 昌 (H25.6～) 一般財団法人 静岡経済研究所 主席研究員
5	学識経験がある者	木 村 幸 男 (H21.6～) メンズ・サポート・しずおか共同代表
6	市民 (公募)	窪 田 美 保 (H25.6～)
7	市民 (公募)	小 林 久 美 (H25.6～)
8	関係団体が推薦する者 社会福祉法人静岡市社会福祉協議会	滝 和 子 (H25.6～) バディプロジェクト代表
9	関係団体が推薦する者 静岡県弁護士会	中 野 江 里 香 (H25.6～) 弁護士法人 ライトハウス法律事務所 弁護士
10	市民 (公募)	中 山 真 弓 (H25.6～)
11	関係団体が推薦する者 一般社団法人静岡県経営者協会	南 條 正 徳 (H25.6～) 静岡信用金庫 総務人事部長
12	学識経験がある者	橋 本 恵 子 (H25.6～) 株式会社 静岡第一テレビ 報道局アナウンス室長
13	学識経験がある者	松 平 千 佳 (H25.6～) 静岡県立大学短期大学部社会福祉学科 准教授
14	学識経験がある者 静岡市校長会	望 月 金 雄 (H25.6～) 長田西中学校長
15	関係団体が推薦する者 静岡地域労働者福祉協議会	望 月 恒 利 (H25.6～) 日立アプライアンス労働組合空調支部 執行委員長

静岡市男女共同参画審議会審議経過

年月日	会議等	内容
平成 25 年 7 月 23 日	平成 25 年度第 1 回男女共同参画審議会	<ul style="list-style-type: none"> ・DV防止基本計画に関する諮問 ・DV防止に関する協議
平成 25 年 8 月	各委員との意見交換	・DV防止基本計画に関する答申案の協議
平成 25 年 9 月 12 日	平成 25 年度第 2 回男女共同参画審議会	・DV防止基本計画に関する答申案の最終協議
平成 25 年 10 月 7 日	市長に答申	
平成 25 年 11 月 6 日	平成 25 年度第 3 回男女共同参画審議会	・DV防止基本計画素案について
平成 25 年 11 月 25 日～ 平成 25 年 12 月 24 日	市民意見募集（パブリックコメント）の実施	
平成 26 年 1 月 31 日	平成 25 年度第 4 回男女共同参画審議会	・DV防止基本計画最終案について
平成 26 年 3 月	計画策定	

静岡市DV防止基本計画策定委員会設置要綱

(設置)

第1条 静岡市は、市におけるドメスティック・バイオレンス（以下「DV」という。）に係る対策の総合的な推進を図るため、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律（平成13年法律第31号）第2条の3第3項に規定する市町村基本計画として（仮称）静岡市配偶者等からの暴力の防止及び被害者の支援に関する基本計画（以下「DV防止基本計画」という。）を策定するものとし、その案の作成のため、静岡市DV防止基本計画策定委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(所掌事項)

第2条 委員会の所掌事務は、次のとおりとする。

- (1) DV防止基本計画の案の検討及び作成に関すること。
- (2) 前号に掲げるもののほか、市長が必要があると認める事項

(組織)

第3条 委員会は、委員長、副委員長及び委員をもって組織する。

- 2 委員長は生活文化局市民生活部男女参画・市民協働推進課長の職にある者を、副委員長は保健福祉局福祉部福祉総務課長の職にある者を、委員は別表に掲げる職にある者をもって充てる。

(委員長及び副委員長)

第4条 委員長は、委員会の会務を総理し、委員会を代表する。

- 2 委員長は、委員会の会議の議長となる。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 委員会の会議は、委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。
- 3 委員会は、必要があると認めるときは、委員会の会議に関係者の出席を求め、その意見又は説明を聴くことができる。

(作業部会)

第6条 第2条各号に掲げる所掌事項について、必要な資料の収集及び整理その他の作業を行うため、委員会に作業部会を置く。

- 2 作業部会は、生活文化局市民生活部男女参画・市民協働推進課男女共同参画担当統括主幹の職にある者を部会長とし、副委員長及び委員がその所属職員のうちから指名するものを部会員として組織する。
- 3 部会長は、部会の会議の議長となる。
- 4 前条の規定は、作業部会の会議について準用する。この場合において、同条中「委員会」とあるのは「作業部会」と、「委員長」とあるのは「部会長」と、「委員」とあるのは「部会員」と読み替えるものとする。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、生活文化局市民生活部男女参画・市民協働推進課において処理する。

(雑則)

第8条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営について必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

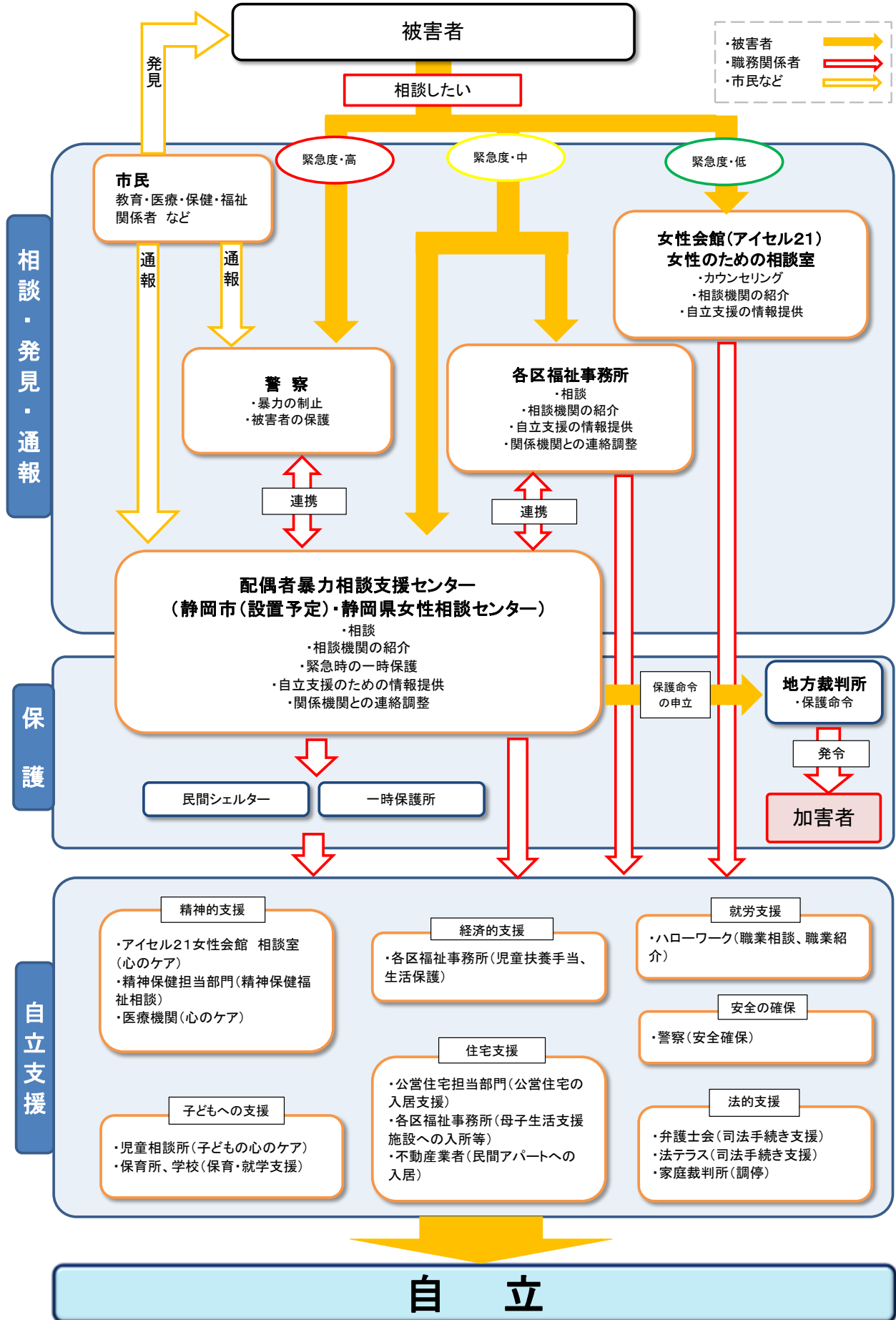
(施行期日)

- 1 この要綱は、平成25年5月28日から施行する。
(この要綱の失効)
- 2 この要綱は、平成26年3月31日限り、その効力を失う。

別表 (第3条関係)

企画局企画部企画課長
生活文化局市民生活部市民生活課長
生活文化局市民生活部区政課長
保健福祉局福祉部障害者福祉課長
保健福祉局福祉部高齢者福祉課長
保健福祉局保健衛生部健康づくり推進課長
保健福祉局保健衛生部保健所精神保健福祉課長
子ども未来局子ども未来部青少年育成課長
子ども未来局子ども未来部子ども家庭課長
子ども未来局子ども未来部児童相談所長
都市局建築部住宅政策課長
葵区役所葵福祉事務所生活支援課長
葵区役所葵福祉事務所保育児童課長
駿河区役所駿河福祉事務所生活支援課長
清水区役所清水福祉事務所生活支援課長
教育委員会事務局教育部学校教育課長

D V被害者支援の流れ



用語解説

あ行	解 説
一時保護	都道府県が運営する婦人相談所に、緊急に保護が必要な被害者を一時的に保護すること。DV防止法において都道府県の役割として規定されている。
オレンジリボン	児童虐待防止運動のシンボル。毎年、虐待防止月間である11月にあわせて、全国各地でキャンペーン活動が行われる。

か行	解 説
固定的な性別役割分担	男女を問わず個人の能力等によって役割の分担を決めることが適切であるにもかかわらず、男性、女性という性別を理由として、役割を固定的に分けること。「男は仕事・女は家庭」、「男性は主要な業務・女性は補助的業務」等は固定的な考え方により、男性・女性の役割を決めている例。
子ども若者相談センター	不登校、ひきこもり、ニートなど社会生活を円滑に営む上で困難を抱える39歳までの子ども・若者とその家族等の悩みについて、面接相談・電話相談を行っている市の機関。また、不登校の状態にある児童・生徒のための「適応指導教室」を市内2カ所で開設している。

さ行	解 説
静岡県女性相談センター	売春防止法第34条に基づき設置される婦人相談所で、DV防止法による配偶者暴力相談支援センターに位置付けられている。
静岡市女性会館（アイセル21）	平成4年に開館した男女共同参画社会の実現のための学習及び活動の拠点施設で、各種講座・相談等の様々な事業を行っている。葵生涯学習センターとの複合施設で、「アイセル21」の愛称がある。
児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）	児童に対する虐待の禁止、児童虐待の予防及び早期発見、児童虐待を受けた児童の保護等を定め、児童虐待の防止等に関する施策を推進することを目的とした法律。
児童相談所	児童福祉法に基づき、児童の福祉に関する事項について、相談や調査・判定、問題児童の指導・一時保護などの業務を行う都道府県や政令指定都市等の機関。
児童扶養手当	離婚や死亡等により、父又は母の一方からしか養育を受けられない一人親家庭などの児童のために、地方自治体から支給される手当。

用語解説

さ行 (続き)	解 説
女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約	男女の完全な平等の達成に貢献することを目的として、女子に対するあらゆる差別を撤廃することを基本理念とする条約。具体的には、「女子に対する差別」を定義し、締約国に対し、政治的及び公的活動、並びに経済的及び社会的活動における差別の撤廃のために適当な措置をとることを求めている。本条約は、1979年の第34回国連総会において採択され、1981年に発効した。日本は1985年に締結した。
女性会館相談室	女性からの様々な相談に応じるため、静岡市女性会館（アイセル21）内に設置している。家庭、仕事、生き方、健康などの女性からの悩みについて、女性の相談員が応じている。「カウンセリング」「法律相談」「健康相談」がある。
スーパーバイズ	ある職種の能力を向上させるために、その職種の熟練者などがその知識と経験に基づき、指導、教育、支援を行うこと。
スクールカウンセラー	不登校や問題行動に悩む児童生徒に対し、カウンセリング等による支援を行うとともに、教職員や保護者に対する助言を行うために学校に配置されている臨床心理士等のこと。
生活保護	生活に困窮する全ての国民に対し、健康で文化的な最低限度の生活を保障するとともに、その自立を助長する制度。
性的マイノリティ	性同一性障害、同性愛、両性愛、先天的に身体上の性別が不明瞭である性分化疾患等の性的な特徴のために、差別や偏見を受けたり、不利な立場に置かれやすいなどの社会的な少数者となっている人々。
セクシュアル・ハラスメント (セクハラ)	性的な言動により、相手方を不快にさせ、若しくはその者の生活環境を害し、又は性的な言動に対する相手方の対応によりその者に不利益を与えること。

た行	解 説
第2次静岡市男女共同参画行動計画	平成21年4月～平成27年3月を計画期間とする、静岡市の男女共同参画推進施策を総合的かつ計画的に実施するための計画。「女性に対する暴力の根絶に向けた取り組み」など4つの重点施策と、9つの基本的施策からなる。
地域包括支援センター	高齢者が住み慣れた地域で安心して過ごすことができるように、介護、福祉、健康、医療など、様々な面から高齢者やその家族を支えていく機関。
デートDV	交際相手（別れた相手を含む）間の暴力。
同行支援	被害者が支援関係機関や医療機関などに直接出向いて相談や手続きを行う際、職務関係者が一緒に関係機関に出向くこと。被害者の立場に立って側面から支援する。

用語解説

た行 (続き)	解 説
ドメスティック・バイオレンス (DV)	配偶者や恋人等の親しい関係にある人から振られる暴力のこと。「暴力」とは、殴ったり蹴ったりするなど直接何らかの有形力を行使する「身体的暴力」だけでなく、心無い言動等により相手の心を傷つける「精神的暴力」、生活費を渡さない等の「経済的暴力」、嫌がっているのに性的行為を強要する等の「性的暴力」を含む。

な行	解 説
二次受傷	相談員などの支援者が、被害者が経験した深刻な被害経験や状況等について聴いているうちに、自らも被害者と同様の心理状態に陥ること。
二次被害	配偶者等からの暴力により心身ともに傷ついた被害者が、保護、捜査、裁判等の過程において、DVの特性や被害者の置かれた立場を理解しない職務関係者の不適切な言動で、更に傷つくこと。
ネグレクト	本来英語で「無視すること」を意味するが、日本では主に保護者などが子どもや高齢者・病人などに対して、必要な世話や配慮を怠ること。児童虐待や高齢者虐待のひとつとされている。

は行	解 説
パープルリボン	女性に対する暴力根絶運動のシンボル。毎年 11 月 12 日～25 日は、「女性に対する暴力をなくす運動」期間であり、パープルリボンにちなんで、全国各地でキャンペーン活動が行われる。
配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律 (DV防止法)	配偶者からの暴力に係る通報、相談、保護、自立支援等の体制を整備し、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等を図ることを目的とする法律。被害者が男性の場合もこの法律の対象となるが、被害者は、多くの場合女性であることから、女性被害者に配慮した内容の前文が置かれている。
配偶者暴力相談支援センター	DV被害者支援の中心的な役割を果たす機関。相談や相談機関の紹介、保護命令制度の利用など情報提供等を行う。DV防止法により、都道府県が設置する婦人相談所その他の適切な施設がその機能を果たしている。また、市町村は適切な施設において、支援センターの機能を果たすよう努めるものとされている。
売春防止法	売春を助長する行為等を処罰するとともに、性行又は環境に照らして売春を行うおそれのある女子に対する補導処分及び保護更正の措置を講ずることで、売春の防止を図ることを目的とする法律。DV防止法が制定されるまでは、被害者に対してこの法律に基づいて保護・支援が行われていた。
PTSD (心的外傷後ストレス障害)	強いストレスを受けたあとに起きる精神障害。不安・睡眠障害・抑鬱(ようつ)がみられ、夢や錯覚により外傷を繰り返し体験する。

用語解説

は行（続き）	解 説
福祉事務所	社会福祉法に基づき設置された社会福祉行政の現業を担う機関。業務は、生活保護をはじめ、高齢者、児童、母子、障がいのある人等の福祉に関する事務を行っている。
婦人相談員	売春防止法第 34 条に基づき、都道府県知事又は市長の委嘱を受け、保護を必要とする女子等の発見に努め、相談に応じ、必要な指導をする相談員。DV防止法により、配偶者からの暴力の被害者の相談に応じ、必要な助言・指導を行っている。
婦人相談所	売春防止法第 34 条に基づき、各都道府県に設置されている施設。もともとは売春を行うおそれのある女子の相談、指導、一時保護等を行う施設であったが、現在は婦人保護事業の中で女性に関する様々な相談に応じるとともに、DV防止法により、配偶者暴力相談支援センターの機能を担う施設のひとつとして位置づけられている。
法テラス（日本司法支援センター）	総合法律支援法に基づき、国民向けの法的支援を行う中心的な機関として設立された公的な法人。相談窓口の案内などの情報提供や、経済的に余裕のない方が法的トラブルにあったときに無料法律相談や弁護士費用の建替えを行う民事法律扶助などを実施する。
保護命令	配偶者からの身体に対する暴力又は生命等に対する脅迫を受けた被害者が、配偶者から受ける身体に対する暴力によりその生命又は身体に重大な危害を受けるおそれ大きいときに、裁判所が被害者からの申立てにより、加害者（事実婚の者及び元配偶者を含む。）に対し裁判所が発する命令。命令には、「接近禁止命令」「退去命令」「電話等禁止命令」がある。
母子生活支援施設	18 歳未満の子どもを養育している母子家庭の母親が生活上の様々な問題のため、子どもの養育が十分できない場合、子どもと一緒に入所できる児童福祉施設のこと。

わ行	解 説
ワーク・ライフ・バランス	一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できること。

静岡市 生活文化局 市民生活部 男女参画・市民協働推進課

平成26年3月発行

〒420-8602 静岡市葵区追手町5番1号

TEL : 054-221-1349

FAX : 054-221-1782